

西 朋

18

1973-6

西朋登高会

目 次

1	会 長 挨 拶	3
2	山 行 総 覧	4
3	山 行 報 告	8
	○70・8 夏 山 合 宿	8
	○ ・10 北 岳 パ ッ ト レ ス	8
	○ ・11 谷 川 岳 (茂 倉 ・ 谷 川)	9
	○ ・12 冬 山 合 宿 (鹿 島 槍)	9
	○71・5 北 鎌 尾 根	12
	○ ・6 三 ッ 峠 岩 登 り	13
	○ ・7 剣 北 方 稜 線	13
	○ ・8 剣 チ ノ ネ 岩 登 り	17
	○ ・12 冬 山 合 宿 (ハ ッ 岳 岩 登 り)	20
	○72・5 中 央 ア ル プ ス (新 人 訓 練)	22
	○ ・6 谷 川 岳 岩 登 り	24
	○ ・7 赤 谷 川 ・ 笹 穴 沢 溯 行	25
	○ ・7 南 ア ・ 赤 石 沢 溯 行 ・ 縦 走	25
	○ ・8 酒 沢 岩 登 り	29
	○ ・11 越 後 三 山 縦 走	31
	○ ・12 冬 山 合 宿 (後 立 山 縦 走)	32
4	○ 福 田 君 を 悼 む	37
5	西 朋 の 現 状	40
6	西 高 ワ ン ゲ ル 近 況	41
7	住 所 録	44
	編 集 後 起	49

会 長 挨拶

小 川 建 吾

創立20年をむかえたわが西朋登高会は、年齢層も上は40代から10代に至るまでの幅広い分布を示している。高校時代の山岳部生活から培われた山へのあくなき欲求と友情のきずなを支えられ今日をむかえることができた。数多くの山行、高校生の指導等を通じて、会員一人一人のうちに限りない財産が築かれたといっても過言ではない。私自身が今まで会から享受したものの大きさを考え新たに加ってくる会員にもそれ以上大きな喜びを受けてもらわんがための一助にと代表を引き受けて早くも2年が過ぎようとしている。OB山岳会は、常に会員の社会的状況の変化に影響されるもろさをもっている。この間の会員の大学卒業、就職による状況の変化のため学生層の減少は会の活動に大きな影響を与えている。会の中軸として最も積極的に活動する部隊は学生会員にはほとんど限られてしまったからである。しかし幸いにして活動部隊の人員的減少にもかかわらず、71年度、72年度とも少数の若手会員による努力はめざましいものがあった。山行内容は充実し決して劣ることなく、むしろ大いに評価されねばならない。このような若手会員の活動に接するにつけ、当然のことではあるが、山岳会として前進するためには、活動部隊への多くの会員からの援助の必要を感じる。中軸となる若手部員の成長のためにも、世代を越えた交りを会員相互の間に作りだそうではないか。

山行総覧(69~72)

69年度

4/28~5/5 谷川岳雪上訓練

参加者：CL 三浦等，SL 山野，三浦潤，岡田，永井，伊東；平木，梅原

5/31~6/1 三ヶ峠岩登り

参加者：CL 三浦等，SL 山野，三浦潤，岡田，永井；目沢，上遠野，梅原

7月 夏山合宿

剣定着岩登り—薬師—三俣—槍—横尾

参加者：CL 三浦等，SL 山野，梅原，三浦潤，岡田，永井

9/13~15 マチガ沢岩登り〔シンセン左俣 東南稜〕

参加者：CL 山野，SL 三浦潤，岡田，永井；上遠野

12月 冬山合宿

白馬岳〔白馬へは行けず〕

参加者：CL 三浦等，SL 山野，三浦潤，岡田，永井

2月(70) 奥多摩美濃戸谷・氷上訓練

CL 上遠野，三浦潤，岡田；梶内，佐久間

70年度

5/3~5 富士山雪上訓練

参加者：CL 山野，岡田，永井，伊東，中村，渡辺

6/12~14 谷川岳岩登り〔シンセン左俣 堅炭岩メルンゼ〕

参加者：CL 三浦潤，SL 岡田，高木，伊東，入戸野，荒木；目沢，梶内

7/27~81 夏山合宿

剣北方稜線(失敗)

参加者：CL 岡田，永井，伊東

8/6~10 黒部上ノ廊下 薬師沢出合—広河原—奥黒部

参加者：L 梶内，三浦等，三浦潤

9/6 丹山・小川谷廊下

参加者：CL 三浦潤，SL 山野，岡田，永井；伊東；高木，入戸野

10/8~11 北岳パットレス〔四尾根〕

参加者：CL 三浦潤，岡田，伊東；小川，山野；高木，山田，依田

11/21~23 谷川岳〔茂倉岳—谷川岳—西黒尾根〕

参加者：L 岡田，永井，伊東

12/27~71, 1/4 冬山合宿—鹿島槍—東尾根—天狗尾根

参加者：東尾根：CL 山野，SL 三浦潤，岡田，伊東

天狗尾根：CL上遠野，SL山野，三浦潤，伊東

天狗尾根は遭難を手つだい中止

71・3/29～31 八方尾根一唐松岳一五竜岳

参加者：L三浦潤，伊東

71年度

4/28 谷川岳雪上訓練（西高合同）

参加者：CL伊東，SL中村，倉重，石川，松田，鈴木，森下；目沢，梶内，依田

5/1～5 北鎌尾根一穂高

参加者：CL山野，伊東，中村

6/11～13 三ヶ峠岩登り

参加者：CL三浦潤，SL伊東，山野，岡田，中村；高木，入戸野，山田，依田；梶内

7/3～4 丹山・同角沢溯行

参加者：CL伊東，SL中村，水口；高木，山田，依田

7/28～8/6 夏山合宿

剣北方稜線（僧ヶ岳一剣岳）

参加者：CL岡田，伊東，中村

8/7～8/13 剣岳チンネ岩登り

参加者：CL三浦潤，SL伊東，山野，岡田，永井，中村，水口；高木，入戸野，山田，依田

10/10～14 北岳パットレス（四尾根，下部岩壁の一部）

参加者：伊東，依田

12/25～1/2 冬山合宿

八カ岳岩登り

参加者：CL山野，SL伊東，三浦潤，岡田，中村；小川

72年度

4/29～5/2 中央アルプス・雪上訓練（縦走中止）

参加者：CL伊東，SL渡辺，西井，吉田；小川

6/2～6/4 谷川岳岩登り：シンセン左俣・東南稜→フェルンゼ

参加者：CL伊東，SL渡辺，中村，西井，吉田

6/24～25 丹山・モチコシ沢（雨で中止）

参加者：CL伊東，SL渡辺，中村，吉田

7/18～20 赤谷川・笹穴沢溯行

参加者：伊東 渡辺

7/27～8/5 南ア・赤石沢溯行・南部縦走

参加者：CL伊東，渡辺，中村

8/19~25 澗沢定着岩登り

参加者：C L伊東, S L渡辺, 西井, 吉田

8/26~29 北鎌尾根一表銀座冬山偵察

参加者：渡辺

9/28 谷川岳・一ノ倉沢南稜

参加者：L 渡辺, 吉田

10/13~16 朝日連峰縦走

小国一大朝日一竜門山一以東岳一大鳥池

参加者：C L伊東, 渡辺, 吉田

11/23~26 越後三山縦走

八海山一中ノ岳一駒ヶ岳

参加者：伊東, 渡辺

12/22~31 冬山合宿・後立山縦走

白馬岳一杓子岳一白馬鎚一唐松岳一八方尾根

参加者：C L伊東, S L渡辺, 中村厚生(元・東大山岳部), 池川義久(元・東大山岳部)

女 子 山 行

70年度

5/30~6/1

沼田一長蔵小屋一燧岳一鳩町峠

参加者：L 入戸野, 山田, 依田

7/31~8/10 夏山合宿

槍ヶ岳一三ツ連一水晶一烏帽子一針ノ木一奥黒部

参加者：L 高木, 入戸野, 依田

12/1~12/4 奥秩父縦走

富士見平一金峰山一國師岳

参加者：L 高木, 入戸野, 依田

12/29~1/2 冬山合宿・南アルプス

夜叉仲峠—薬師岳—観音岳—地藏岳

参加者：L高木，入戸野；梶内

71.2/24~26 奥秩父

鴨沢—雲取—飛竜—将監峠

参加者：L高木，入戸野，依田

8/28~4/1 春山合宿

渋ノ湯—黒百合平—白駒・高見石—天狗—夏沢—松原湖

参加者：L高木，入戸野，依田

71年度

6/18~20 谷川岳

三国峠—平標—仙ノ倉—万太郎—谷川—西黒尾根：参加者：L入戸野，依田，東郷

7/28~31 夏山合宿

三伏—荒川—赤石—百間洞—聖岳—上河内—茶臼—光岳往復—畑薙

参加者：L入戸野，依田，東郷

8/6~13 剣定着岩登り合宿

室堂—三田平—剣本峰往復—源治郎尾根—六峰Cフェース—八峰—池の平—仙人池

参加者：L入戸野，高木，山田，依田；梶内，山本太一，平木

12/28~31 冬山合宿・八カ岳

行者小屋定着・硫黄岳・赤岳

参加者：L小川，入戸野，依田

8/22~26 春山合宿

戸台—丹溪山荘—北沢峠—仙丈岳往復—戸台

参加者：L入戸野，依田

72年度

6/8~7 天神峠—谷川—一の倉—清水峠—朝日岳—檜倉山—柄沢山—巻機山

参加者：L入戸野，東郷，田辺，渡辺

8/11~20 夏山合宿

冷池—鹿島槍—五龍—唐松—白馬—朝日—黒岩山—白鳥山—糸魚川

参加者：L入戸野，渡辺；山本太一

山 行 報 告

〔70・8〕夏山合宿

予定 剣北方稜線から三ノ窓定着

メンバー CL岡田、永井、伸作

この山行は従来の西朋の夏合宿の形タイとは違った形で行なう予定であったが剣岳での岩登りの為の用具を縦走にもちこんでしまったり又現実認識の甘さから軽量化をはからなかった事等の理由で失敗に終わった。この稜線は水はほとんど雪けいに頼らざるをえずこの為各自4ℓを用意したりで重量が45Kgにもなり最初の僧ヶ岳の登りも荷物を分けてやっと途中まで行けたという状態であった。そこで計画を変更毛勝谷をつめることにしたが僕が下りでねんざし残りの二人で毛勝谷に向かわせた。しかしそれも雪渓上部で岩壁にははまれコルへ達せられず引返した訳である。なおこの山行の雪辱は71年度に行なわれた事を記しておく。 岡田記

〔70・10〕北岳バットレス岩登り

参加者（CL）三浦潤、山野、岡田、伊東、高木、山田、依田；小川

10/8 11時頃、大樺沢二俣付近にテントを張る。午後、下部岩壁帯Dガリー付近の岩場を登ったり、懸垂下降したりの訓練を行った。

10/9 Bガリー付近の岩場に取り付き下部岩壁帯を乗越す。四尾根の取り付きまでは、すぐであった。潤さんと高木さん、岡田さんとぼくでパーティーを組む。岩はしっかりしており、下には白峰御池、大樺沢と展望が開け高度感もあり気分爽快。しかし、二パーティーがそろそろと数珠つなぎでは、時間がかゝって仕方がない。で、結局、九時に取り付いたにもかゝらず頂上に着いたら、もう二時を回っていた。予想外に疲労し、頂上で昼寝。下山途中、八本歯沢で、今日入山した山田・依田に出会い、やはりDガリー付近で訓練をした。

10/10 今日は、高木さんと僕が下山し、昨日入山の山田・依田を潤さん、岡田さん、更には今日入山の小川さん、山野さんで、訓練する。訓練後、今日入山の二人は、十字クラックにゆく。敗退。一日中曇り空だったが夕方には遂に雨となる。

10/11 山野さん、潤さんは中央稜。残りの小川さん達は、四尾根という予定であったが昨夕から雨やまず、おじゃん。昨日入山、及び一昨日入山の四人には、気の毒な山行きであった。 伊東記

〔70・11〕 谷川岳

メンバー CL岡田, 永井, 伸作

11/20 上野発, 同じ列車に友達のいる東大の山岳部の連中が乗りあわせており将利がその中にいた。

11/21 土樽-茂倉新道を経て茂倉岳

この山行は冬合宿の準備としてラッセル及び雪中の訓練を目的としていた。しかし雪は頂上近くにしかなくラッセルの目的は果たせなかった。この日は茂倉岳の頂上のすぐ下にテンパった。一応ブロックを積む練習をした。

11/22 朝の天気図で低気圧が近づいていたが一応谷川岳までということにする。ラジオで「山に登る」(知る人ぞ知る)を聞いてなる程と思う。谷川までは何という事なく午後からはお天と様がでて頂上にスキーヤーがいたのに少々おどろく。

赤旗まで持っているこの我々の重装備が恥ずかしかった。小屋の上にテントを張り後でザイルで確保練習やコンティニアスを練習したが気分のらず。雪は全く少なし。

11/23 西黒尾根を経て土合へ

朝起きたら30cm位雪がふっていた。雪がふっていて視界悪く出発してから一時間程立ち尾根を間違えて西黒沢をおりているのに気づく。おりるにつれ岩場がでてきてナグレそうないやな所に出たからで地図をみてたら左手で人の声がしてやっと間違いに気づいた訳である。視界の悪さと昨夜の降雪で尾根の左折点を見失った訳。西黒尾根はクサリ場の所がアイゼンをつけていたため少々手こずった。なおこの一週間後にどか雪が降った訳で幸運だったのか不幸だったのかはわからない。

岡田記

〔70・12〕 冬山合宿

鹿島槍-東尾根・天狗尾根

参加者 東尾根:山野(CL), 三浦潤(SL), 岡田, 伊東

天狗尾根:上遠野(CL), 山野(SL)三浦潤, 伊東

東尾根

三浦潤, 岡田, 伊東は, 12月26日朝, 新宿を出発し, 築場からバスで鹿島槍国際スキー場まで行きそこで幕営。山野は, 27日朝合流してたゞちに歩き始める。大谷原を経て, 大冷沢に入り, 約30分でエン堤。わかんをつけて尾根に取り付く。通常のルートより少し手前で取

りついた。尾根上に出るとトレースがあり、ラッセルはたいしてなかった。1800m地点で幕営。

12/28 わかんでトレースの中を尾根通しに進む。天気がよく荒沢、天狗尾根を見ながら進む。一の沢の頭、二の沢の頭、三の沢の頭を通して荒沢尾根とのジャンクションにテントを張る。狭いところだったが、雪をけずってなんとか一張分のスペースを作った。すぐ上に小さな岩峰があったので第一岩峰かと思い、潤・山野で偵察に行ったが、その岩峰は左を簡単に回り込めて、約20分後、第一岩峰についた。ザイル1ピッチ分が雪の壁になっており、その上に右にトラバースする。フィクスが二本ついていた。二人は岩峰の下で雪洞を掘っていた。登れそうだと判断してテントに帰った。

12/29 6時、小雪の中をアタックに出発する。他のパーティーは、第一岩峰で引返していた。天気がよくないので、第一岩峰をとりあえず登って、後の行動を判断することにした。最初10mほど岩場を右手から登り、雪壁を20m登ったところで確保する。みんな雪のついた岩場は初めてなので時間がかかった。ザイル一本で4人なので、なお時間がかかった。そのあとは少し微妙なトラバースで上にぬけた。第一岩峰の上は、ゆるい雪壁で、上からパーティーが降りてきており、トレース赤旗もあったので頂上まで行くことにした。尾根上のところを通り第二岩峰に出る。下に雪洞が掘ってあった。リッジ杖を20m進み、その上はチムニー状であった。少してこずったけれど、前の人の残していったアップザイレンのロープを利用してなんとか登れた。そのあとは尾根の上をどんどん進む。視界は数十メートルしかきかなかつた。北峰頂上に出たとたん、強い西風が吹いており、剣、立山の方は晴れていてよく見えた。4時すぎでおり、時間が遅かったので、風をさけ少し下で軽い食事をしただけですぐに引返した。第二岩峰下で日が暮れてしまい、第一岩峰上の雪面で道がわからなくなってしまった。約一時間迷ったがようやく赤旗をみつけて、下ることができた。第一岩峰はフィクスを使ってアップザイレンで下ったが、少し長さが足りず、最後でズッコケタ人が何人かいた。テントに着いたのは22時過ぎていた。

12/30 快晴。前夜遅かったので、朝はゆっくり寝ていた。テントをたぐみ、一気に下った。下から多くのパーティーが登って来た。雪崩の音が、遠くの方で何度も聞えた。荒沢で落ちるのも見えた。何度も上を振り返りながら下った。夕方大谷原に着き、幕営した。

12/31 曇り。今日は休養日。遅い朝食後テントの横にイグルーを作ってみた。直径2m高さ1.5m、ノコとスコップで4人で一時間半かかった。少しせまかったので、使わなかった。

1/1 朝8時、テントを撤収しているところへ上遠野さんが来る。岡田と別れて鹿島川を逆登り天狗尾根に向う。途中のえん堤の梯子が、荷物があつたのでこわかつた。取入口を過ぎて荒沢に入るとすぐ支尾根にとりつく。林の中の急な登りで尾根上に出て、第一クローアールの少し下で幕営。

1/2 小雪。雪が60cm積もっていて、まだ少し降っていたので、上が不安なため停滞とする。潤さんが風邪ぎみである。昼になり、何パーティーか登つたあと、天狗の鼻まで行く。第一第二クローアールともフィックスがあり、どちらも約40m。天狗の鼻の先の最低コルで今朝一番に出た熊本のパーティー8人が雪庇を踏みぬいて約80m落ちていて、他のパーティーとともに救助の手伝いをたのまれた。この日は下までフィックスザイルを張つたが、夜になつたので、遭難者はビバークする。上遠野、山野は天狗の鼻の大きな雪洞で寝る。

1/3 天狗の鼻にいた十数人で救助に向う。ヘリコプターで大町からパトロール隊の人やザイルが来る。上遠野さん、山野と、熊本の人と三人で遭難者のところへ下る。二人はなんとか歩けるので上に引っぱり上げたが両足を骨折した一人は体重も重く、引上げられないのでスノーボードでカクネ里へおろし、ヘリコプターでつり上げた。気流が悪く、つり上げるまでに何度もかゝつた。天狗の鼻までくると、日は暮れていたが、テントまで帰つた。

1/4 晴。日程の都合で今日下る。頂上に行けないのは残念だけど仕方がない。尻制动で下っているとき、伸作が木にぶつかって足をねんざした。鹿島国際スキー場を通つて帰つた。今回の合宿は小人数であつたがまとまがついて、機動的に動けた。前半の東尾根ではアタックの日はかなり無理をしたが、昨年白馬で慎重すぎてアタックできなかつたのでやってみたが、日が暮れて迷つたりしてかなり危なかつた。後半は、遭難救助のため、アタックはできなかつたが大変いい経験をした。

山野記

コースタイム

東尾根

12/27 スキー場7:50—大谷原8:50—9:30堰堤10:30—の沢下15:45

12/28 発7:40—ノ沢頭9:00—二ノ沢頭9:45—幕営12:45

12/29 発6:15—7:00第一岩峰9:45—10:30 第二岩峰13:45—荒沢の頭14:30

—鹿島槍頂上15:10—幕営地着21:45

12/30 発12:00—ノ沢手前12:50—堰堤14:45—大谷原15:15

天狗尾根

1/1 発 8 : 15 - 荒沢 出合 9 : 15 - 第一クローアル 12 : 35

1/2 発 12 : 00 - 偵察 - 遭難を知る。

〔71・5〕北鎌尾根

参加者 C L 山野, 中村(正), 伊東(伸)

5/1 朝, 大町で寝ているところを一日遅れて東京からやってきた山野さんに、起こされる。あわてバスに乗る。バスは満員。このバスの客の半分は、北鎌へ行くような気配。七倉からは、林道工事中の道を行く。果して、客の半分は北鎌へ行くらしく、濁小屋を過ぎても前にも、後にもパーティーが見られた。いささかうんざり。一昨年の大水の影響か、軌道歩きを免れ、ほとんど河原沿いに一気に湯俣まで歩く。湯俣川の水は、硫黄に汚染され、飲料に適さない。湯俣から千天の出合まで、はざワンピッチ。千天出合にはすでに20張り以上あった。ぼくらは、明日の行動を考え、北鎌沢出合付近の岩小屋にツェルトを張る。

5/2 北鎌沢のブロックを警戒し、早く立つ。北鎌沢は、多少急だが、二ピッチ半で、北鎌のコルに出た。ここに昭和山岳会が雪洞を掘っていた。上遠野拾い乞食先生には及びもせぬが、サラダオイルとマッシュポテトを拾い、軽量化のため貧しくなった食料を潤おす。体調は抜群にいゝし、時間も早い。今日中に槍の穂先に立てるかと思うと、ついペースも早くなる。独標は、雪に蔽われ、予想した千丈沢のバンドトラバースもなく、いとも簡単に頂上に立つ。槍が、すぐそばだ。昼食にする。食っているうちに天候悪化。槍が見え隠れするようになる。PBあたりで、風雪となる。PBを越えたところで幕営。他のパーティーは、まだ歩いているし、時間もまだ10時。幕営とは、なんとも意気をそがれる。ツェルトを張ったが、風も強いし、居住性も悪かったので、雪洞を掘った。

5/3 天候が気になる。雪洞の中は外界とは隔絶しているので、外のことは、なにもわからない。外を恐る恐るうかがう。空はまっ青。しかし風は滅法強い。雪洞が手狭だったせいか、出発に手間取った。強風で目もあけられない程なのでゴーグルをし、コンテでゆく。槍直下まで千丈沢から吹き上げるこの強風を全身でうけていたため疲労する。槍穂の登りは、雪の付き具合が悪くヤバイところもあったが、割と楽だった。頂上及びそこから眺めた槍沢は雲霞の如き人であった。南岳の避難小屋まで行き行動終了。今日も雪洞を掘った。

5/4 起きて見たら雪洞の入口はつまっている。案の定、降雪。風も相当強い。沈殿。

西穂までゆくという計画がこれで縮小させられた，残念。入口からの雪の侵入は激しい。交代で除雪するも，しまいには除雪する端から雪が侵入しどうにも手に負えなくなる。多少の工作もしたが無駄で，入口の除雪を諦め雪の侵入するまゝにした。そのため入口は完全に雪で埋まり，あげくの果てに雪洞内は酸素不足，ラジウス・ローソクは消え，寒くはなるは心細くもなり，遂には呼吸まで苦しくなった。結局この雪洞に見切りをつけ避難小屋に逃げた。

5/5 空も晴れ風も強く鯉のぼりを揚げるには絶好である。でも山にいてはこれも大して有難くない。たゞ寒いばかりだ。切戸を越して瀨沢・上高地に降りるつもりであったが全員にその気がないのは互に顔を見合せればすぐにわかり、結局、槍まで引き返し上高地に降りる。奥穂までも行けなかつたのが今更くやまれる。

伊東記

〔71・6〕三ツ峠岩登り

参加者：CL三浦潤，SL伊東，山野，岡田，中村，高木，入戸野，山田，依田：梶内

6/11 入山し，一般ルート及び一般左ルートで練習。第一バンドから，第一クラックを登る。

6/12 午前：一般右（女子），観音ルート（男子） 午後：T字クラック，十字クラック，サンドイッチクラック，を登り，仕上げの意味で大根おろしをやった。伊東，中村の新しいトップ要員には，よい練習となった。

6/18 午前：地蔵ルート，一般左ルート，ハトリカンテ 午後：草溝ルート，T字クラック，ハトリカンテ，を登る。ハトリカンテでは，トップ要員にアブミの懸け替え教え，この三日でトップとしての基礎技術を一応修得させようという当初の目的は達した。

伊東記

〔71・7～8〕夏山合宿 剣北方後線

この山行きは昨年の敗退の延長線にあるもので僕自身又メンバーの人も何となく心残りがあり今年度再度試みたものである。この北方後線を候補に選んだのはたまたま田部重治氏の毛勝山行に魅せられ更に過去の記録で宇奈月から剣への山行きをよんだこと，又人の行かない所に行きたかった為である。

参加者 (CL) 岡田 伊東 中村

期間 7/28—8/6

7/28 (雨後曇) 宇奈月から僧ヶ岳

前夜自衛隊の宿舎の屋根の下にねる。朝雨であつたが出発する。2ピッチと少しで登山口に着く。去年は真夏の太陽の下を汗だくで歩いた道である。今年はすべてアタックザックにする事が出来又重量も25kg以内に押えられた。途中で地元の青年が追いこしていく。これ以後5日まで人に会わない。2ピッチで1200m避難小屋、水を補給、僧ヶ岳までは道はある。8ピッチ程で頂上下の別又乗越着、クロユリが咲き乱れ五色ヶ原の様相、水場は近くにあった。

宇奈月 5.40 — 登山口 8.30 — 避難小屋 10.15 — 別又乗越 15.10

7/29 (晴後曇ガス) 駒ヶ岳の先まで

3時半起床得利食欲なし。5時半発30分で僧ヶ岳頂上ここから先は道がない。適当にヤブに突入する。倒木とササがほとんど。ヤブの中にもうすい所があり道らしき跡はある。稜線をはずさないようにしていくがすぐ変な方になってしまう。ヤブが切れた狭いコルで昼飯。全員ヘルメットと軍手でヤブをかく。駒の頂上から黒部側に雪渓が見える。ヤブの中の尾根下りは非常にヤバイ。特に午後は必ずといってよくガスが出て支尾根を下る危険が多くなる。途中から黒部側に出て適当な雪ケイのそばにテンバる。きたない雪渓であつた。平らな所がなくねるのに苦労した。

起床 8.00 — 出発 5.30 — 僧ヶ岳 6.00 — 駒頂上 12.30—2.10↔2.40 の間迷う
幕営 16.25 — 就寝 20.00

7/30 (晴後曇) 前サンナビキ手前のコル

5時起床朝日がまぶしい。サンナビキ山までピークが5個程、一つ越すのに一ピッチ、朝歩き始めてからすぐ葎、このコースが一番きびしいといわれていたがやっぱりバテバテになる。水筒は始め4つあつたが1つ落して3つ計6ℓ。所々やせた崖つぶちに出るがやぶでないのホッとする。昼食と行動中用に3ℓを使用。午後からはガスがかゝり下りになるとすぐ尾根を間違える。何度も木に登りガスの一瞬の切れ目をまつた。全員バテバテになって進むが水のある所にいけず。6時頃二人を偵察に出し前サンナビキを越えていない事がわかりがっかりした。しょうがなくヤブの中の小さなスペースにビニールをしく。水が8ℓしかないので明日のことも考え一人200CCでビスケットを食う。テントをかぶってねたがヤブ蚊がひどく寝れなかった。

発 7.30 — 昼食 10.45 ~ 11.35 — 幕営 17.30

7/81 (晴後曇) ウドの頭手前まで

今朝も水1人200CCでビスケットを食い元気に出発、連日の藪で体力の消耗が激しいが仕方がない。今日も朝から藪、前サンナビキは密集したササである。登りは別にヤブの中でもむずかしくはない。何となく人の通った跡はわかるものである。我々も随分助けられた。次のコルでガレ場を黒部側へ200m程下って水を取りに行く。ラジウスとL米等をもっていく。草つきの急な所でやばかったが全員のパテがひどく水を補給したかった。雪溪のシェハンド内で存分に水を飲みゼンマイをとってごはんをたく。コップェルに入れて雪を持っていったがとても役立つ。サンナビキの頂上からウドの頭がみえ途中までヤブの稜線をさけて斜面を横切る。ヤブに入ってから道を間違え反対方向の支尾根に入り込む。30分程してから間違いがわかる。全員パテパテ故木に登ってガスの切れるのを待つやらで一時間程消耗、赤旗のついていた所を右に下るのが正解であった。夜6時二人を偵察に出したが雪溪のある谷まで遠いという事で崖の端を整地して幕営する。今日も水は4L明日はどんな谷でもおいて水を補給することにして飯をたく。

起床8:30 発5:30 水補給9:05 - 12:20サンナビキ山1820 - 迷う16:05 - 17:10 - テント地18:00 - 幕営19:30 - 就寝21:30

8/1 (晴後ガス) 平坑乗越

今日は半日停帯の予定で平坑乗越までとしたがパテ具合はかわらず。大分ヤブにもなれ水不足にもなれる。皆あきらめの気持強く毛勝山にいけば助かると思って頑張った。変なピークを片具側にまいてウドの頭の手前のコルに着く。黒部側の谷の雪溪を目差しおる。シェハンドの奥深く入り水をとる。ウドの頭を越えたあと又ガスが出てきて乗越への下りの為2-3回尾根がわからなくなる。その都度木に登る。ほとんど白樺か松で松は登りやすい。平坑まであいかかわらずのヤブをこぎ乗越着。だだっ広い所で始め片具側を少し下っていったが水は望めず。ワラジを発見する。黒部側の雪溪ははるか下の方だ。たが溜沢を20分程下ると岩かげに清水がたまっていた。久し振りに水で体をふく。今日は時間もあまりうまい飯をたく。

発6:50 - ウド手前コル8:00 - 雪溪着8:40 - コル発 - 9:30平坑8:30 - 就寝7:30

8/2 (晴、晴晴) 毛勝山頂

今日で2回目の遅刻。4時半起床伸作を水くみに出す。連日のL米にいや気がするが全部食う。出発8:10。空はピーク太陽キラキラ毛勝は高くそびえているという訳。毛勝はどこをどう登るか見当つかず。赤旗を頼りに進む。8:40西谷山通過所々ヤブが切れるとピッチがはかどる。何しろ暑い。9:50感じのよい所に雪溪あり。初めてのシャーベットを食う。後ガレ場をつめ少し岩場らしき所を慎重に6~7m登り、太い竹ザサのヤブを登る。これを抜けた所で休む。次のピッチは又ミックスしたヤブでその中で昼食。後一ピッチで頂上に着く。全員感激。今日

はもう動く気がない。こゝで始めて導標を見る。頂上直下は大雪溪が広がりかなたに裏剣がみえ。後立山又僕達が歩いてきたコースがみえた。伸作が顔をくしゃくしゃにして喜んだのが印象に残る。夕日に映えた剣が美しく今合宿中一番良い日であった。ゆっくり飯を作り8時就寝。

8/8 (晴後曇)ブナクラ乗越へ

もう藪が余りないという安堵から足取りも軽くなる。6時10分発雪溪がいくつも現われる。雷鳥に出会う。雪溪から流れる水をヘルメットでかぶったりしてのんびりといく。三ピッチで猫又山をこえる。頂上から大きな雪溪をグリセードで各自てんで下る。このブナクラへの下りは複雑で何度も道を間違えた。途中のきたない急な雪溪で昼飯。又藪に突入して右往左往する。下りの竹藪は始末が悪い。腕力を相当消耗する。この下りで僕が竹のはね返りで目を少し怪我した。三ピッチ程でようやく乗越着。小さなスペースにテントをはる。遠くブナクラ谷の出合いがみえる。小黒部谷側に水を求めておりていくが展望つかめず。そこでブナクラ谷をおりていくがなせ岩のゴロゴロした谷で仲々水が流れていない。40分位下った所がかすかな水の流れる音を聞き赤谷尾根側の伏流した水がそこだけ勢いよく流れ出していたのを見つける。幸運であった。

発610-猫又山900-昼飯1000-ブナクラ乗越1440

8/4 (晴後晴)赤谷山経由大窓へ

朝水くみ後8時発 すぐ藪に突入、赤谷山への登りである。藪にはうんざりしていたので皆へばり気味。一ピッチで開けた所で休み。赤谷尾根が右手に見える。又藪に突入汗をかきかき2ピッチで頂上、雪溪が大きく残っている。冬幕営したらしく残がいが多々あった。剣が大きく目前にあるがどれが三ノ窓かよくわからなかった。白萩山は何という事のない山、藪をコギヌ山腹の雪溪を横断したりで赤兀山の登りにかゝる。赤兀白兀は岩のゴツゴツした稜線で両側はストーンと切れているが道はちゃんといっている。フィックスもあつたが風が時々強くふくとバランスがくずれやばい。夕日が迫まる中をのんびりと赤兀のピークの岩に登った。岩苔をとったりして大窓についたのが5時半。大窓の雪溪がコル直下までつきあげていてまことによい幕営地である。遠く富山の町も見える。明日池の平山を越えるか大窓をおりるか迷ったが下りの方を選んだ。小窓から小窓王への高度差が圧倒的であった。

発800赤谷山1215白兀1420大窓1745

8/5 (晴後曇)大窓雪溪から池平小屋 のんびりと8時頃出発。雪が反射してまぶしい大窓雪溪を各自適当に下る。僕と伸作は関節炎のためゆっくり下りる。大きなクレバスが幾つもある。小黒部谷の出合い9時20分。小黒部谷下流はきたない雪溪で埋めつくさおそろしい感じがした。こゝから池の平小屋まで雪溪が続いているがかなり荒れていた。大きな岩が手

で触るとゴロツと動く。上部の雪渓は二俣に分かれ右のをつめて草つきに出る。その頃雨がふりこの草つきには緊張させられた。10時半池の平小屋につく。久し振りに会った人間が、野郎の集団であるとは少々がっかりした。小屋のビールとラーメンで合宿の成功を祝う。台風で風強く今日はこゝまでとする。

8/6 (曇後晴)

池から30分で三ノ窓雪渓との出会い。

ニピッチでチンネの下につく。途中スノーブリッジのようなやはい所が一個所ある。池の谷側にテンパる。10時30分であった。食料はほとんどなく午後は岩の上で甲干しをする。

以上が今年の夏山合宿である。新しい試みでもあり反省する点も多いが何はともあれ自分の満足する山行が出来たと思う。なお参考に使用器具をあげておく。

石油 65 L (消費 8 L) シェルトナポールラジウス一台、医薬 (cf. セノールは虫さされに役立つ、又メンソレータム) ザイル (使用せず) 三ツ道具少々、コップェル etc 食料は朝はすべてL米、味そは粉末、し好品は従来のヨーカン等の重量級はさげ量もへらした。

岡田記

[7・8] 剣岳チンネ岩登り

参加者 (CL) 三浦潤, (SL) 山野, 岡田, 永井, 中村, 伊東, 水口, 山本, 高木, 入戸野, 山田, 依田, 梶内

8/7 剣北方稜線の縦走を終えた岡田さん、正俊、ぼくは、11時頃、長次郎のコルにボッカを協力してくれる女子一行を迎えに出掛けた。しかし、彼女らは、見えない。退散。今度は、ぼく一人で迎えに行く。岡田さん、正俊は、ジヤングルムへ岩登り。ぼくは、長次郎で、一行を待つ。しかし、西朋一行は、見えず。時間的にもう遅く、一時は、一行のボッカは、今日ないものと諦めた。しかし遂に彼女らを確認。再会。ボッカの荷を受けとり男子は、三ノ窓へ。女子は、剣岳本峰へ。女子のボッカに感謝。

8/8 潤さん、水口組と、正俊、伸作組それに岡田さんと永井さん組が、夫々中央チムニー aバンド、bクラックと左方ルンゼ、aバンド、bクラックの二本を午前、午後に分けて登る。中央チムニーは、傾斜もゆるく高度感もなく、容易すぎてつまらない。岩は、多少もろい。左方ルンゼは、取り付けが少々ヤバイが、あとは、非常にザラザラした傾斜のゆるいルンゼ。aバンドは幅もあり、十分足が置け高度の割には、いさゝかの恐怖感も湧かぬ。bクラックも、

クラックとは名ばかりで、クラック登りなどは要求されず、豊富なホールド、スタンスを使い、容易に登れた。なお、岡田さん、永井さんの組は、左方ルンゼを行く予定がルートを取り違え、左フェースを登る。これも大体において容易、しかし、1ピッチ目に多少ヤバいところがあり、岡田さんはスリップをした。

タイム：中央チムニー、aバンド、bクラック。取付き8.40—チンネ頂上1000。左方ルンゼ、aバンド、bクラック。取付き1250—中央バンド(ここで順番待ち)—チンネ頂上1505

8/9 昨夜、剣尾根パーティを1つ出すこと決定。メンバーは、潤さんとぼく。このルートは、ガイドブックによると、ハーケンを連打せねばならない第一峰、モンブランのエキユのような第二峰を含み、かなり手強いそうだ。我々は、長い登標になると考え、早々と幕営地を出発。早朝の寒さ、静けさに、身が引締まる。以後、昨夕三ノ窓に入った山野さんと、永井さん、水口の組と、岡田さんと、正俊の組が、日嶺、gチムニー、c、dクラックと左稜線を登る予定で出発。結局、山野パーティは、左稜線上部を諦め、岡田パーティは、予定のルートのほか、左方カンテを偵察した。さて、剣尾根パーティである。取付きまでは、途中スノーブリッジなどあったが順調に行く。取付きから稜線までは、草付であった。緊張のせい、この草付き、結構危険に感ぜられた。稜線は、ハイマツに被われており、その間を縫って第一峰に向う。途中、20mほどの岩場を越す。恐怖感がつめる。二ピッチ程で、遂に第一峰に来た。黒々として居丈高であった。ルートは、明瞭に読めるが、ホールド、スタンスともに乏しい。それにもかかわらず、登攀意欲は湧く。潤さんに頼みトップひきうける。案の定、ホールド・スタンス共に乏しいが、フリクションをきかせ快調に直上。ここで幅5cm程のバンドを、アンダーホールドを使いトラバース。実に微妙。バンドを抜けた所に、ピンがあり、バランスを維持する。さらにそこから、吊り上げを二回くり返し、少々登ると岩峰上に出る。ここから40分程で、第二峰。第二峰は池の谷左俣側にルートをとる。20m程バンドが横に走っているのがそれ。まずアブミでバンドにのし上がる。以後、トラバースであるが、これは極めて容易。

こゝを越すとドーム頂上はすぐそこ。こゝで昼食。こゝから剣尾根上半部は、岩がボロボロで、神経を使った。全体として、予想よりも登攀は容易であり、命拾いしたような気がした。タイム：取付き620—稜線710—1110ドーム頂上1155—幕営地1345

8/10 岡田さん永井さんの組は、剣尾根のみ。山野さん、正俊の組は、左フェースからgチムニー・c・dクラック。潤さん、ぼくの組は、日嶺・aバンド・c・dクラック。こゝではぼくの登ったルートについて述べる。ルートは、まず、中央チムニーの右ななめ上に突き上げるルンゼにとる。容易。ただし、順番待ちを2時間も喰い、いらだった。こゝに

限らず、順番待ちが非常に多い。ルンゼを登りつめると核心部の5m程のスラブ。前のパーティは、ここをアブミの懸け替えて登った。ぼくは、彼らの登り方を大袈裟だと考え、できるだけ、フリーで登るよう心掛けた。それに、懸け替えて登れるだけ、アブミを持っていなかった。結局、登るにつれてホールド・スタンスが極端に少なくなり、進退極まった所で、墜落。5m程で止まる。向う脛を打撲。潤さんは、手首にけがをした。まことに申し分けない。それにしてもよくピンが抜けなかったものだ。今後は自重しよう。転落で奮起し、今度は、アブミ二つを使い切り抜ける。左のクラックに移る。そしてバンドに達する手前で、リップに移るが、ここは、多少緊張する。gチムニー・c・dクラックは容易だ。

タイム取付き7・50—チンネ頂上930

午後は、女子のボッカに対する御礼として、岡田さん永井さんを除く、男子5人で、女子を六峰Cフェースに連れていく。RCCルート・リッチルートを登る。各パーティとも2時間位で抜ける。以後、八峰の頭を経由して、三田平に帰る女子を熊の岩あたりまで送った。

8/11 山野さん、正俊は剣尾根へ。昨日、三田平から引越してきた高木さんは、岡田さんとともに、中央チムニー・aバンド・bクラックを登る。潤さんとぼくは、左稜線に行く。永井さんは、休み。午後は、潤さん、高木さんが、日嶺・aバンド・bクラックへ。岡田さん、永井さんとDフェースへ。

こゝでは、未述の左稜線について書く。チンネの向って左端にあるからこう名付けられている。取付き1ピッチで稜線にあがる。以後、5ピッチぐらいで下半部の登攀は、終了する。岩登りとしては、実に容易である。ただ、ところどころにあるハイマツの枝がジャマになる。下半部登攀終了点は、大きなテラスだ。ここから上半部の登攀が始まるわけだが、最初の1ピッチに時間を食うため、下半部をとほしてやってきたパーティがすでに、三組も順番待ちを喰わされていた。ぼくらは、結局現在登っているパーティも含めると5番目になった。最初のピッチは、上手下手の差もあろうが、だいたい40分位かかるようだ。したがって、ぼくらが登れるのが約2時間半後ということになる。今さら引返すのもいやだし、なんだか、うんざりしてしまった。ぼくは目の前の手強そうな岩を見ているだけで自信がなくなりそうだし、岩登り合宿前の10日間のヤブこぎでかなり疲労しているこの腕では、相当腕力が必要と思われるこのピッチを乗り切る自信もなかった。腕を休めることも考え昼寝とした。かれこれ1時間位は熟睡した。こんな岩場のテラスでの昼寝も気持ち良い。いよいよ順番が回ってきた。ところが、手違いでぼくらは、二本のアブミしか持ってきていなかった。このピッチは、どのパーティもアブミを懸替えて登っているのだ。あと2本のアブミ不足の不便さは、吊り上げの積極的利用と、シェリングで作った簡易アブミで、ごまかすことにして取付いたが、やはり道具不足がたゞり、かなりのバランスクライミングとなった。このピッチは20mで区切りやっと一人一人立てる岩かどで、確保した。次のピッチも多少バランスが要求されるが上半部の核心部はこの二ピッチだ

けであり、あとの2ピッチほどは、階段を登るにも等しい容易なもので、全体として予想をかなり下回るレベルの登攀であった。なお、岡田さん、永井さんはルートを誤まり、時間切れで敗退した。

8/12 左方カンテへゆく予定であったが、雨のため中止。沈澱となり、ひもじい一日を過ごした。

8/13 雨天ではあったが下山。

伊東記

[71・12] 冬山合宿(八カ岳)

参加者：(CL)山野, (SL)伊東, 三浦潤, 岡田, 中村

12/25 車で美濃戸口まで行く。ここから久しぶりに重荷(約37Kg)を背負い鉾泉へ向う。生憎天気は悪い。美濃戸を過ぎたあたりから小雪となる。北沢沿いの道は、増水で荒れているとのことで尾根を巻きつつ進む新道をゆく。このためか、鉾泉までは予想外に時間がかかり着いたのは18,25。

美濃戸口 18,25 - 美濃戸 14,30 - 鉾泉 18,15

12/26 今日は、みぞれである。出発がチユウチヨされ、結局、沈澱。

12/27 昨日から一向に天気回復しないが、小雪であったため出発。赤岳主稜&南稜の予定。小雪のため視界が悪く、主稜の取り付きを誤る。結局、ショルダー右リッジに取り付いたため、進むべき方向を失う。とにかく前進し、下部岩壁帯を右に巻き急斜面を登るとヤセ尾根に出た。ここをわずかにつめるとなんと南峰であった。結局われわれは、ショルダー右リッジ、主稜、南稜と斜上したことになる。頂上で昼食の後石室をまわって帰幕。起床、4,30 - 発 6,40 - ショルダーリッジ右 8,10 - 下部岩壁帯 9,10 ~ 11,30 - 赤岳南峰 12,00 - 帰幕 14,15

12/28 曇り。昨日、山野さん、岡田さんが入山し今日は二パーティ出す。
[小同心稜] 潤さんとぼくでいく。北沢沿いに進み小同心ルンゼに分れる手前で、右稜と左稜の間のルンゼに入る。滝にぶつかった所で右稜にルートをとる。ザイルワンピッチでちょっとしたオーバーハングの岩場にぶつかる。岩といつてよいのか、非常にもろくてポロポロ

しており、取り付けない。かといって他に取り付く所もない。右往左往するも結局どうしようもなく退却。今度は右稜と左稜の間のルンゼをつめることにする。しかし、小同心稜を登るには、もう時間が足りない。したがって偵察程度にとどめることにした。ルンゼの中程には、小滝があり、これは乗越せるが、さらに進むともろい全体としてオーバーハングした岩壁にぶつかり、アブミを所持しないわれわれには無理であった。もう一パーティは、裏同心ルンゼを登った。〔小同心稜パーティ〕起床 4 3 0—発 7 3 0—取付き(右稜・左稜間のルンゼ) 9 1 0—帰幕 1 6 0 0

12/29 快晴。正俊帰京。山野さんは風邪のためテントキーパー。潤さん、岡田さん、それにぼくで、小同心チムニーをやることにする。小同心ルンゼ経由でゆくことにする。初めはたかをくくっていたが、このルンゼなかなか厳しく傾斜がほぼ50度位で、キックステップで登るのが苦労だった。ルンゼもほぼ終る頃小滝にぶつかり、これを乗越す。すると傾斜もゆるくなり小同心チムニー取り付きに出た。ルートは二つとれる。一方は直接チムニーに入り込むもので、これは岩が堅くハーケンを受けつけず無理。もう一方は、迂回してチムニーに達するもので、正規のルートらしい。フリーでは登れない。アブミの懸け替えて登ることにしたが、何分岩が極度にもろく、むしろ泥といってよい程で、ハーケンがぐらつく。まず、岡田さんがやる。だましましアブミに乗り、打ち進むも4本目位で、ハーケンが全部抜けて墜落。あわやそのまゝ谷底へかと思われたが、岩場基部の幅70cm位の雪道でうまく止まった。次に潤さんが、いどむも、これまた5~6本目あたりでハーケンが抜け、墜落。これではどうしようもない。他にルートを求めたが、いずれも岩がもろくもう恐らくて登る気をなくす。時すでに2時。帰ることにする。大同心ルンゼの上部をつめて稜線にでる。硫黄をへて帰幕。
起床 4 3 0—発 8 0 0—小滝 1 0 1 0—小同心チムニー取付き 1 1 3 0—放棄 1 4 0 0—稜線 1 5 3 0—帰幕 1 7 3 0

12/30 潤さんとぼくは裏同心ルンゼにゆく。山野さんと岡田さんは、主稜に向う。しかし小雪が降り続き山野さんたちは、取り付きを誤り、ショルダー右リッジを登ってしまった。容易。

〔裏同心ルンゼ〕ルンゼに入りしばらく行くとf₁に出る。カッティングで登る。高さ4m位で容易。以後f₂, f₃は問題にするほどのものではなく容易に乗越す。いよいよ問題のf₄。まず潤さんが登る。青氷にアイスハーケンを打ち込みアブミで登るが、氷が堅くハーケンを打つのが骨だ。4本目打ったところでくたびれてぼくに交替。ぼくは、こんな経験は初めてなので、氷に打ち込んだハーケンを氷ごとぎ取れはしないかと不安だ。そのため尻びり腰で、もたついていたため、たかま7m位の氷壁を乗越すのに2時間もかけてしまった。これから上部には、目ぼしい滝もないので、左岸の尾根を乗越し、隣のルンゼをつたって引き返す。

〔裏同心ルンゼ〕起床 5.00—発 8.45—f₁ 9.15—1.1.00 f₄ 13.00—帰幕 15.00
〔ショルダー右リッチ〕発 8.30—取り付け 10.00—ショルダー 14.00—帰幕 16.00

12/31 曇りのち晴れ。潤さんとぼくは、行者小屋にいた入戸野、依田とともに帰京。行者小屋から来た小川さんと、山野・岡田さんと大同心ルンゼに行く。ルンゼをしばらく行くと見上げるような大滝に出る。これがガイドブックにいう2段50mの滝である。壮観だ。一段目はカッティングで登る。2段目はちょっと高すぎてアブミの懸け替えてもなかなか困難。装備不足と時間的な遅さから、これは左側を高巻く。その後、中程度の滝を1つ越え、小同心の下に出た。大同心稜を經由して帰る。

起床 5.00—発 10.00—10.45大滝 13.00—中程度の滝 15.00—小同心の下 16.00—帰幕 18.30

1/1 晴れのち雪。9時に起床し、そのまま沈没。まあ、元旦ですからね。

1/2 でも今日は帰らねばならない。居残り組は、ろくろく登れなかった。

伊東記

〔72・5〕雪上訓練・中央アルプス縦走

参加者 (CL) 伊東, 渡辺, 西井, 吉田, 小川

4/29 快晴。千畳敷山荘より、1ピッチで、極楽平に到着。幕営後、極楽平下の斜面で、キックステップの訓練。午後、小屋の上の斜面で、スキューを横目でにらみつつ、キックステップ、滑落停止の訓練。真也が足を引っ掛かり中止。

4/30 快晴。小屋の上で、滑落停止の訓練。途中、今日入山予定の小川さんが、やってきた。午後は、6月の岩登りに備えて、ザイル操作及びジッヘル（ジッセル）の訓練。夕方から、天候がぐずれてきた。天気図によると日本海を今夜986mbの低気圧が通過するらしい。遂に、雨がバラつき始める。しかし、「敵は日本海にあり」だから、まあ、たいしたことなかならうと、たかをくくっていた。8時頃から、雨に加えて風もかなり強くなった。それに、気温の方は、薄気味悪いほど高い。積雪が少なく、ブロックを積み重ねたので、一応、テントの状態が心配になる。なにしろ、強い風をとまなつた暖雨である。こいつが、張り綱を支えているペグを掘りおこしたら、それこそ大変だ。ペグを、しっかりと埋めなおす。8.30に就寝。静かになると、風や雨の音が、なんだかものすごい感じ。と突然、金属音とともにボールがはずれた。すわ、一大事。雨具を着たまゝ寝ていた小川さんが、すぐ外へとび出し、それをなおす。だが、テントにもどるとすぐにまたボールがはずれた。しかし

あまりに風が強くと外へ出てもう一度ポールを嵌めるのは、危険とのことなので、風が息をつくまで待つことにした。ひたすら、テントを支える。しかし、一向に風は息をつかない。10分もすると今度は、フレームが一本はずれ、あとは、将棋倒しに全部はずれてしまった。こうなってはもうだめ。万が一の場合いつでも飛び出せるように、必要最小限のものをサブザックに入れ、雨具を着て身辺を整え、一応、テントに最後まで頑張ることにした。皆が四隅に立ち、まだ立っているポールを支える。しかし一度崩れかけたテントは、我々では維持しようもない。遂には、残るポールも全てはずれ、全くテントをひつかぶった状態になってしまった。これでも外へ出るよりはましだろうと、朝まで頑張ることにする。風が極度に強いいためテントの布がはためき、ぼくらの頭をゴツン、ゴツンと打ちつける。こういっただけの場合、眠気をもよおすのが常だが、お蔭で、眠気ざましになる。初めのうち四隅で頑張っていた皆も次第に風に押し寄せられ一つに固まってしまった。しだいに眠くなる。互いに声をかけ合い耐える。今は、なんだか気味悪い位気温が高いが、そのうち冷えてくるに決まっている。そうしたら、へたすると凍死。そんなのは御免こうむりたい。あとは、もう起きろ起きろの連呼である。それにしても時のたつのは遅い。三時頃に一度ローソクをつけようとするが無駄。ピンチのメタを取り出してチョコレート溶かして皆に飲ませる。明るくなるまでもう少しだ、さあ…と思っていた矢先、テントに遂に穴があく。手で穴ふさぎ、時を待つもたいして風は弱まらず。そのうち穴が拡張しもう風の侵入を防げなくなった。外は、多少明るくなった。詮方ない。極度の疲労とそれに伴う事故を考え、必要最小限のものを持って、残りはザックに全部詰めテントごと放置し脱出。もう命からがらである。テントが飛ばないように処置しておこうとは考えもせず、小屋に逃げる。案の定途中で、シュラフやザックが風に飛ばされてくる。ショックだ。小屋に着き、朝食をとるとボタンキュー。もうなんにしてもグロッキーだ。昼ごろ極楽平から吹き飛ばされた所持品の一部が飛んできたとの小屋の人の知らせで、恥をかきつつ回収に向う。

5/2 やっと天気は、おさまり始めた。極楽平まで、所持品を捜しに出掛ける。途中で一部を回収し、更に登ると雪面に大きな亀裂。危険を感じとり、以後の回収を諦め退却。帰京。

伊東記

このような事に至った原因を考え、反省を加えてみる。

〔直接的、物理的要因〕

I 986 mb の大型低気圧の影響をもろに受け、強風であった。しかし、極楽平は稜線であり積雪が少なかつたため、ブロックが積めず防風対策が充分・万全でなかつた。

II 気温が高く、雨が降ったためスカートにかぶせてあつた雪が全て溶け、スカートがまくれ上がり、スカートの下のテント本体とポールを結ぶ紐がほどけ、そのため入口の一本のポールがはずれた。これが直接の原因となってテントの全ての骨組みが解体した。

〔人為的要因〕

I 風の威力を過大評価し、2度目にポールがはずれたとき即座になおそうとしなかつた。こ

これは風がそのうち息をつくという判断によるのであるが、以後一向に風が弱まらず、むしろ強くなったという結果から考えると、大きな失敗であったと考える。

〔反省〕もし、このような事態が、脱出路や小屋がすぐ近くにない場所で起ったなら、どうなるかと考えると、まったく恐ろしくなる。強風や雨に対する配慮が万全でなかった事は深く反省せねばならぬが、もしかりに、このような気象条件においては今回のようなテント崩壊も止むを得ないと考えても、我々の処置にはさまざまな欠点があったと思う。テントを維持することに主に気をとられ、冬天が雨をじかに通してしまふことに気が充分まわらず、所持品を濡らさぬよう万全の配慮・処置を行えなかったのは、その一つである。もし、容易に退避できぬ場合には、これらの所持品を更に使用せねばならないのである。また、脱出の際、テントやザックを飛ばないように処置できなかったことも大いに反省すべきである。その他様々の失敗があるのかもしれないが、今は、はっきりとそれが何であるかわからない。とにかく、誰もけがもなにもせず、無事であったことだけが唯一の救いである。これを戒めとして今後ではできるだけ慎重に山行を行うことにする。

伊東記

〔7 2・6〕谷川岳岩登り訓練

新人にとっては、初めての岩登りであった。不安と期待に胸を鷲せ、してみると、こんなものかというのが日本で岩登りの常かも知れない。(参加者：C. L. 伊東、中村、渡辺、西井、吉田)

6/1 新宿で集まり、伊東と中村が交互に運転する車でマチガ沢出合いに着いたのは、12時過ぎであった。設営してすぐ寝た。

6/2 シンセン沢左俣を登攀した。中村と吉田、渡辺と西井と伊東でザイルを組む。ともかく初歩であるから、何でもなような所でも、スタッカーで進む。途中で、アブザイレンの練習をしたり、最後のつめで、脆い岩場に遭遇したりで、時間を食ってしまった。途中で、渡辺の落石により、置いてあった西井のザックが転がり落ちるという事故があったが、特異なミスであった。右俣を下降して帰幕したのは、夜遅くなつてからだ。発750—シンセン沢出合い840—取り付け940—登攀終了(東尾根)1730—帰幕2020

6/3 体調の悪い中村は、シンセン沢に昨日、落したザックを回収に行き、他は、マチガ沢東南稜を登る。一汗流して、雪渓を登りつめて、取り付けに出る。渡辺と吉田、伊東と西井のザイルパーティである。始めの2Pまでが、ちょっと嫌だが、セカンドの新人は平気な顔で登ってくる。2P目の途中の岩穴にイワヒバリが巣を作っていて、親鳥が飛び出して来たので、こちらも驚かされた。伊東たちは1P目でザイルが岩角で動かなくなり苦勞し

た。岩陰の「エーデルワイス」を楽しみつゝ攀ずればいつか国境稜線である。厳剛新道を下る。焚火を囲み、フキその他、得体の知れぬ山草のテンブラを賞味した。

発 7 1 5 — 取り付き 1 0 3 0 — 終了 1 5 0 0 — 帰幕 1 7 1 0

6/4 具合の悪い中村を残し、4人で一ノ倉のニルンゼからザッチル越えを目差したが、降雨のため、中央稜裾尾根の途中から引返した。昼食後、撤収、帰京する。

発 6 1 0 — 引き返し点 8 1 0 — 帰幕 1 0 1 0

渡辺記

〔72・7〕赤谷川笹穴沢溯行

上越の山々は、2000mに満たぬとはいえ、他の山域にない魅力を持つ。なだらかな山稜に広がる草原と、深く刻まれた谷は、なお、原始的な様相を帯びている。その渓流を溯り、草原で泊まった夏の日は、楽しい思い出である。

参加者 伊東、渡辺

7/18 猿ヶ京温泉では、ネムの大木が満開であった。川古温泉まで、林道を避け、牛の放牧場を抜ける右岸の小道を行く。笹穴沢出合までは、暑い林道歩きとなった。出合より一時間ほど入り、河岸の砂地を泊まり場とする。新緑から洩れる光を受けて、釣り糸を垂れた。

7/19 クロガネと称する岩峰は、奥多摩の稲村岩に似て、面白そうではない。次々と現われる2~80mの滝を、適宜、ザイルを出して登る。100mの滝といって、期待はずれであったが、そこを越すと、谷が開け、空が近くなる。稜線まで緩く草原が続き、雪の消えた後には、サクラ草が微笑していた。平標の山頂で土樽に下る伊東と別れ、渡辺は、草原に残る。夕刻よりガス。夜、北風強し。

7/20 晴れていれば、昼寝でもするはずが、風に追われて、万太郎山より吾策新道を経て下山する。

渡辺記

〔72・7〕南アルプス、赤石沢溯行

登山に於ける原初的なものを求める試みとして、今年の夏に行なった剣岳北方稜線の縦走に続き、この夏は、未知な沢の溯行を計画していた。飯豊や朝日の沢は、魅力的であったが、新人の参加も考慮し、赤石沢に決定した。そして、トレーニングとして、6月には丹沢のモチコシ沢（雨で中止）、7月には赤谷川笹穴沢を溯行するなど周到な準備のあと実行に移した。山行

直前に、新人が2名とも種々の事情で参加を拒否したのは、それだけに残念であった。

参加者：(L)伊東、渡辺、中村

7/27 山の出発は、夜の上野駅か新宿駅が相応しい。朝の東京駅からの、通勤客と混じっての出発は照れくさかった。小川、平木、岡田氏、依田、吉田の見送りを受けて離京。列車を乗り継ぎ、夕方井川村に着く。バスの待合室にて寝るも、野犬が群れをなして徘徊し、びくつく。夜小雨、前途を気遣う。

7/28 チャーターした車で、林道を走る。中ノ宿の手前で、道路が崩壊していた。車を棄て歩き出す。荷物は、軽量化して、25kgほど。懸念していた空は、晴れ上がり、暑いくらいになった。碓氷は落葉松林と野菜畑の美しい小盆地だ。牛首峠を越え、10mも下れば赤石沢の河床である。峠より彼方に稜線が見える。右岸の踏み跡を行き、腰までの徒渉で左岸に渡ると、イワナ淵に臨む台地に出た。よくぞ名付けたイワナ淵、魚影はあれど、針にかゝらず、激しく炎をあげる焚火を空しくした。

井川村600—上河内710—碓氷1110～1230—幕营地1400

7/29 壊れた棧道を修理したり、アブザイレンや徒渉を繰り返して(1ヶ所ザイルをフィックスする。)ニエ淵廊下の入口につく。兩岸は岩壁となり迫り、噂に違わず、大高巻きを強いられた。ここで、6人の明大山岳部パーティーが右岸に渡る橋をかけていた。数時間をかけて木を切り出してきたという。利用させてもらったのは有り難いが、前がつかえてしまった。「原初」の登山を求めたはずのこの谷で、以後、このパーティーと抜きつ抜かれつすることになった。ニエ淵を高巻くルートは白旗氏のルート(岳人267号所載)以外は見い出せなかった。木の根につかまり、急な尾根を登る。その先に鈍目や古い伐採跡があったが、途中の僅かな平坦地でビバークとした。右側を8分も下ればルンゼで、水を得られたのは幸いであった。先行した明大パーティーも戻ってきて、すぐ隣に幕営した。

発600—ニエ淵入口(1000～1230)—ビバーク地点1700

7/30 右側のルンゼを下り、途中から右の樹林帯を横切り別なルンゼに入る。ザイルにつかまってまっすぐ下ると、神ノ淵だ。イワナの主でも潜んでいそうなコバルト色の淵である。赤石沢には、大きな滝は8つほどしかなかったが、洶々たる水をたぐえた淵のため、何度も行く手を遮られた。先行した明大パーティーは裸になって、徒渉点を探している。少し登り直して右手のバンドを下るとうまい具合に沢に出た。へそまでの徒渉で右岸の岩稜にとりつき、少し登って右手の黒色のルンゼを下る。これで、ニエ淵の難所は通過できた。小さい高巻きやへつり、徒渉を繰り返すと、やがて、川幅が広がり、気楽に河原を行くと北沢

の出合であり、左岸に幕営地を求めた。夕飯を終えて茶を飲んでいると、明大パーティーがきて、少し上に幕営する。

発600—神ノ淵900—北沢出合1505

7/31 明大に先行し出発。1時間も行くと40mはある、立派な滝に出合った。右岸の草付きの凹部にザイルを10mフィクスする。これが赤石沢の「大滝」に違いない。予想外の行程に気をよくし、右や左から流れ込む小沢に小雪溪沢や向沢の名をあてはめつゝ登る。一度淵に遮られ、左岸を大きく高巻き40mのザイルいっぱいのアップザイレンで、河原に降りる。昼食。更に進む沢は巨石累々として、沢添いに行けるか不安であったが、よくしたもので、梯子や肩車を利用して乗り越えた。そして百間洞の分岐に出た。そう信じた。百間洞を少し行くと7mほどの滝に阻まれる。右岸に巻道を求めるも、上部が悪くて登れない。2時間程もたついていると、明大パーティーが追いついた。この小さな滝が「大滝」であった。奥赤石沢と見たのはシシボネ沢であった。愚かしく誤認、色眼鏡を通した眼には、無名の沢さえ、立派な支流であったわけだ。あまりのぼせてはいけぬ。期待し過ぎてはいけぬ。明大は「右岸のクラック状のルンゼ」を登り出すも苦しんでいる。こちらは、白旗氏のルートを探り、右岸を大きく巻く。木の根に掴まつての苦しい登りであった。適当にトラバースして、けもの道を下ると、以外と早く河原に降りられた。ここでまた明大と鉢合わせ、競争するように幕営地を探す。桂の木の下での湿気の多い台地に幕営する。

発640—ヌエ淵755—3段の滝1085~1115—シシボネ沢出合(大滝)

1280~1520 (高巻き)幕営1780

8/1 今日中に稜線に出られるだろう。出発して、すぐ小雪溪沢で、出合には残雪があった。大雪溪沢出合では、ジュラルミンの破片を拾う。美しい大きな丸型の淵に出合った。陽は、SUNSUNと降り注ぐ。皆裸になって、淵に飛び込む。白いしぶきが光の中で燦めく。ひとしきり泳いで、甲羅干しをする。南アルプス最奥の谷での、我が最上の休日。先を急ぐ。「大学山岳部」は行かせるがよい。激しい登攀の合い間に、山の慈愛に満ちた懐で憩えるのは、登山家の大きい特権だ。特に夏山に於ては。百間洞の出合で昼食。大きな赤い石の上に立派なケルンが積んであった。ケルンの石の間に先蹤者のメモが残されていた。我々も覚え書きを残す。「我們謝謝天恵」と書き添えた。百間洞まで来ると、水量も減じて丹沢並みとなった。大滝の左岸を巻くと、兩岸が開け、沢は緩やかに百間平へと続いている。百間洞露営地へは一投足であった。

その夜、私達は盛大な焚火を囲んだ。無事に溯行し得たのは、まず好天に恵まれたことだ。それにチームワーク。フィクス工作や徒渉、アップザイレン、偵察、それに毎夜の焚火。前途への不安と一時の安らぎがあった。自由な精神をもって山へ向かう者に、山は大きな恩恵をもたら

すであろう。彼を強く育むであろう。谷間の夜の訪れは早い。残照が高く稜線に輝く時、既に谷間は暗く閉ざされる。そこでは、原始から我々の祖先の力となった炎が唯一の慰めであった。そして、今、稜線に出て、近くなつた空の下で、焚火を囲む。星々と炎との交歓と書きたいところだが、実は夕方より曇天となり、一晩中、焚火をしても、寒くてよく眠れなかったのである。

発 7 5 0 — 小雪溪沢 7 5 5 — 大雪溪沢 8 1 5 — 大淵の滝 8 5 0 ~ 1 0 0 5 — 百間洞露营地
1 3 5 5

8/2 休養日とする。中村は昼寝、伊東と渡辺で赤石岳往復。サンダルをひっかけて登った伊東は「正統派」登山者のヒンシュクを買った。かなりの予備日が余ったので、光岳までの縦走を決める。

8/3 聖岳山頂で、一瞬青空が望まれた他は、一日中、深いガスの中であつた。沢に比べ、縦走路はハイウェイの如き気楽さがある。聖平は一面テント村であつた。沢の中でと同様夕食後、読書の時間を設けた。中村はスタンダールの恋愛論、伊東は「氷川清話」渡辺は、立原道造の伝記を読む。私達は、ロマンをも愛するつてわけだ。

発 7 1 8 — 禿島 9 4 5 — 聖岳 1 2 3 0 — 聖平 1 4 3 0

8/4 上河内岳で、畑薙から登ってきた高木、佐久間女史とはつたり出会う。二人ともエネルギーの化身の如し。乏しい食料より鮎を差し入れる。仁田池を過ぎると縦走路の雑踏もかなり減る。仁田池から仁田岳までの道は、昔、夢に見たような道。青い空に白い雲の下、草原の中、谷内六郎氏の絵の如きいつか見た山である。針葉樹林が岳樺に変わるとセンジク原であつた。渡辺は、イザルガ岳にケルンを積みに往復した。そして、光岳で世界最南端のハイ松を拜む。急な下りにうんざりする頃、芝沢小屋に夕方着く。荒れた小屋を避けて河原の砂地で、最後の焚火を楽しみつゝ寝入る。

発 5.5 0 — 上河内岳 7 2 5 — 仁田岳 8 5 5 — 光岳 1 4.0 0 — 柴沢小屋 1 8 2 0

8/5

寸又峽への林用軌道は、数年前に撤去されていた。大根沢出合から、200mほど高巻き工事の林道に出た。山のひだに沿って、くねくね続くいやな道だ。車を拾えないのと、南アルプスの山奥まで伐採されるのを悲しむ。林道を離れ、千頭ダムまで降りると軌道跡を来た人と出会う。我々より、ずっと後に小屋を出、休みつつ来たという。途中、鉄橋がいくつか落ちていたと言う。折りからの雨にかかわらず、最後は走って、寸又峽温泉発最終のバスに間に合わせた。あわたらしい幕切れが、ちっぽけな感傷を吹き飛ばしてしまった。これが山

なのだ。自由な精神の発露と苦難を乗り越えた経験は、いつか、社会生活の中で、懐しい青春の一コマとして思い出されるであろう。また、逆境にあつて、自己の力を信じさせてくれるだろう。その時まで、山の記憶は、私達の心の深層で眠るであろう。

たゞ残念なのは、この経験を直接に受け継いでくれる新人の参加がなかつたことだ。それが個人的充実感とは別に、「西朋」としての損失であつたように思う。しかし、新たに山を登り出す次の世代は、彼らなりの道を、模索して行くであろう。

発 7 0 0 一寸又峽 1 6 5 5

〔72・8〕 涸沢岩登り合宿

新人に基礎的技術を教えると共に、去年の剣岳での成果との上に、面白い登攀をするのが目的であつた。しかし、悪天にたゞられ、所期の目的を達成できなかつた。(参加者：C L伊東、渡辺、西井、吉田)

8/19 曇 涸沢入り。5日間の定着合宿であるが、コンパクトな荷であつた。上高地から徳沢園まで1時間で歩かされた。涸沢の手前で吉田の足がつる。

上高地 7 0 0 一横尾 9 1 0 一涸沢 1 3 1 0

8/20 曇のち雨 前穂IV峰へ行くはずが、雨で、5・6の雪溪の下から引き返す。停滞。夜西井がジンマシン発病。診療所の世話となる。原因、ピフテキの食い過ぎか。俺知らねえ。

8/21 風雨

終日、雨。停滞。毛布もびしょぬれ。夜、吉田が何度も、もどす。

8/22 雨のち曇

雨が止むのを待って、午後、体調の悪い吉田を除いた三人で、白出しの科尔より北穂まで足ならしをする。北穂小屋ではお茶をサービスして貰った。夕方、テントの前で悪天をばやいていると「涸沢仙人」が通りかゝり、従軍の思い出話などをして曰く。「若い時の苦勞は金を出してもするべし。」傘を振り回す動作がチャップリンのようであつた。夕飯後、ヒュッテの裏の大岩で、アブミの掛け替えの練習をする。

発 9 0 0 一白出しの科尔 1 0 3 0 一北穂 1 3 0 0 ~ 1 4 0 0 一帰幕 1 5 0 0

8/23 晴のち曇

待望の晴天。4人で、前穂IV峰、明大ルートに行く。基部に着く頃にはガスが出て、はっきり

ルートが確認できなかつたが、斜め右に登る。伊東と西井、渡辺と吉田のザイルパーティー。なんなくIV峰に出た。あと、奥穂まで足を伸ばし、ザイテンを下る。吉田は体調が良くないと不調そうであつたが、時には、無理をすることも必要であろう。夜、吉田が熱を出したので明日は休ませることとする。

発700-5・6のCOL710-取り付き900-IV峰1200-前穂1420-奥穂
1540-帰幕1710

8/24 晴のち曇

四尾根で事故があり救助活動を行なうと知らされたので、一尾根に変更した。しかし、Cフェイスのバンドを左にトラバースし過ぎて、ルートをはずれ難渋した。残置ハーケンに頼り強引に通過しようと、伊東、渡辺で試みるも失敗し、退却することとなった。惨めな気持ちで、B沢に登り直した。渡辺のルート判断のミスで、特に西井には済まなかつた。テントでは吉田が一人心配していた。山本泉氏(20期)が東京医科歯科大パーティーを率いて入山していた。

発600-尾根取り付き1000-ルートの間違いに気付くも試登する1400-退却
1500-北穂1730-帰幕1900

8/25 伊東、西井はパノラマコースを経て下山。渡辺と吉田は二尾根に登る。あと、北穂のチムニーを渡辺が試みるも敗退した。昨日の落石での打撲のせいにして見たもの、みっともなかつた。

発730-二尾根取り付き1130-終了1210-北穂チムニー1440-帰幕1620

8/26 雨

雨の中での下山。渡辺は横尾で留まり、北鎌尾根に登ることにし、吉田がテントを持ち帰った。

発900-横尾1100

8/27 晴

北鎌尾根登攀は、渡辺と吉田で計画していたが、吉田の不調のため、一人で登ることとなった。昨日は終日雨で、横尾の避難小屋に泊まり、今日は願ってもない快晴であつた。槍沢の大曲がりより水俣乗越しに出、不用な荷物をデポ。北鎌沢右又をつめて、天狗の腰掛けにてビバークする。道松の枯枝で焚火をする。

発700-水俣乗越1130-北鎌沢出合1345~1425-天狗腰掛1700

8/28 夜明けと共に出発するもすぐ雨となり、視界がきかぬ。沢の分からぬまゝに、槍の頂を索通りして、歩きに歩いて燕山荘に着いたのは600過ぎ。ツェルトを立てる柱がなくて苦勞する。またしても、びし濡れ。

発5.35—槍915—大天井15.00—燕山荘1745

8/29 快晴、燕岳で日の出を拝し、中房温泉へ下る。この時点では、冬山合宿に表銀座から槍往復を計画していた。松本の都築先生を訪ね、夕食を御馳走になった。西朋のメンバーが来たのは久しぶりとかで、歓待された。

渡辺記

〔72・11〕越後三山縦走

積雪期の越後三山縦走は、伊東が、三年来抱いて来た目標であったという。たゞ、厳冬期となると、大がかりな準備を強いられるので、まだ天候の安定している11月下旬に行なった。そして多くの目標が達成された後、あまりに容易であったと思えるように、あっけなく終わったがこの幸運を私達は素直に山に感謝したい。(参加者：伊東、渡辺)

11/28 終日、快晴無風であった。順調に、千本槍小屋まで入る。金剛靈泉から積雪はあったが、トレールがあり、苦にならなかった。八海山の岩峰は近付くほど威圧的に迫る。小屋は他の三パーティーと同居することになった。夜は、満天の星、麓の上越線を夜行列車が通過する。夜、伊東が、奇妙な経験をした。

大崎神社715—金剛靈泉850—女人堂1250—千本槍小屋1405

11/24 午後からガスが出たが、晴れている間に八海山の難所を通過できた。I峰は巻き、II～VII峰は露出した鎖や梯子に助けられる。VIII峰で先行パーティーに追いつく。10mほどだが急峻な雪壁を、鎖を掘り出して登りきる。厳冬期の八海山の通過は遙かに困難となろう。五竜岳あたりからガスが出始める。この縦走の核心は、オカメノゾキの通過であった。記録には片足を置くのがやつのナイフエッジとある。高度差500mの大きなギャップで滑落事故も多い。この通過のため、二人で、麗の大崎神社で手を合わせて拜んだものだ。下るにつれ、尾根は瘦せてくるが、この時期ではブッシュが出ていて、ナイフエッジになっていない。両側が落ち込んでいるようだがガスで見通しがきかぬので高度感から来る不安もない。奥多摩の稜線を歩くような気持ちで、オカメノゾキを通過できた。黒又沢の頭らしい小さなピークに設置する。二人はいるともういづばいの小さなサレワ型テントである。一瞬、霧が晴れると、ブロックを積む足の下は、黒又沢に深く落ち込んでいた。ラジウスの生ガスを吸って苦しむ。

発 6 3 0 — 雁峰 9 0 5 — 五竜岳 1 0 4 5 — オカメノゾキ 1 2 4 0 — 幕営 1 4 1 0

11/25 御月山の手前 1 0 0 m ほどは、見事なナイフエッジであった。昨日、ガスの中で通過したオカメノゾキは遙か眼下にある。膝までのラッセルで、中ノ岳の広々とした頂に立つ。この頃よりガスが出始めた。檜廊下は、名前の如く、檜の枝の中を通るいやな所だ。いつか雪も降り出し、視界も効かない。更に、渡辺の体調が悪く、少し歩いては休む有様で小屋ついたのは夕方であった。南に一つ埋まり残った窓より入ると、小倉尾根よりの登山者で、中はいっぱいであった。風邪気味の渡辺はすぐ寝つき、雑用をみな伊東に任せてしまった。

発 4 3 0 — 御月山 9 0 0 — 中ノ岳 1 0 5 0 ~ 1 1 2 0 — 檜廊下 1 2 1 5 — 天狗平 1 4 0 0
— 駒ノ小屋 1 6 1 5

11/26 一晩中、吹雪いていた。風雪の治まるのを待つ間に、他パーティーは次々と下山して、私達が最後となった。視界はなく、トレースを頼りに不安定な雪の中を下った。駒ケ岳のピークを踏まなかつたのは心残りだが、可能な内に下るべきだ。予報は悪天の来襲を伝えていた。小倉山で振り返る駒ケ岳は黒雲に包まれていた。源頭で大奥壁を有する佐梨川に沿って 1 時間、大湯温泉は田中角栄の地盤の新潟 8 区であった。

発 9 1 0 — 小倉山 1 0 5 0 ~ 1 1 1 0 — 駒ノ湯 1 3 0 0 — 大湯温泉 1 3 5 5

渡辺記

(72・12) 冬山合宿・後立山縦走

当初新人の吉田が行く予定であったが、個人的理由で行けなくなったため、新人訓練を目的とした冬山という所期の目的を変更し、更にスケールの大きな山行を考えた。しかし弱小西脚は、実動メンバー二人でしかないため、いろいろな制約があった。そんな時に正俊の友人で東大山岳部をやめた中村厚生、池川義久両君の冬山参加申し入れがあり、計画の拡大が可能となった。四人の一致で、目標を後立山縦走ということに決定し、コースとして白馬岳から五竜岳を選んだ。日数は、各人の都合で 1 0 日間という多少短いものではあったが、そこは軽量化、機動性をもって補うことにした。

参加者：(CL)伊東、(SL)渡辺、中村、池川

12/22 快晴

地元の人によると久しぶりに晴れたそうだ。雪積は、かなり少ない。親の原から一気にリフトで鶴峰下まで行く。まだ、スキー場では誰も滑っていない。スキー場から歩き始めるなんて

かなり意気をそがれる。早大小屋で届け物を渡す。茶を飲ましてもらう。早大の連中の話だと稜線は雪が少なく所々夏道が出ているようだ。成城小屋を過ぎてから1ピッチ目までは暑くてオーバースボンを着けているのが邪魔な位だ。今日中に乗鞍まで行けるかと思う。しかし、以後次第に雪が増し、天狗原に着いたときにはすでに3時でもあったので幕営。池川とぼくで、乗鞍へ登る急斜面の雪の状態を偵察する。残る二人は、食事その他の準備をする。強風のためスコップが飛ばされ粉失。(アルミ製)

リフト終点 845—早大小屋 1020—成城小屋 1130—天狗原 1450

12/23 曇—風雪

昨夜から懸念された天気も、そう悪くはない。しかし、天気図によると、午後からは荒れそうだ。急いで、白馬まで行かねば。ラッセルは膝までで、割と快調に乗鞍まで行く。小屋の方へ回わず、そのまま船越の頭へラッセルをつづける。途中で、小屋回りで夏道沿いに行けばラッセルなしで船越の頭へ行けることを知る。かなり雪は少ない。船越の頭からは、アイゼンに履き替える。小連華に着いた時には、そろそろ雲が剣を蔽い始め悪天候の知らせ。すぐに吹雪になるだろう。雪庇の張り出しも小さく、喜仁は二度も冬の白馬に登ったことがあるので、多少天気が悪くなくても白馬までは絶対に行くつもり。三國境からは、吹雪となり視界は10m位。しかし、所所に夏道のペンキがあるので助かる。白馬の頂上までは二ピッチだった。先輩たちが、荒天に悩まされて登れなかった白馬の頂上に立つ。白馬なんて天気さえよければ登れるものだ。テントに寝るのが厭で、頂上の小屋に入る。本当は、下の村管小屋を使うべきだろうが、なにせ吹雪にいためつけられていたので、ほんのちょっと前まで別のパーティーが利用していたことを理由に入らせてもらった。中は広くてまことに快適。

12/24 風雪。天気図によると、冬型ではない。しかし、視界が悪く行動は控えた。2日間のラッセルで疲れていたので良い休養になる。夜の天気予報によると、大平洋岸に大雨をもたらした低気圧が千島沖に抜け、いよいよ明日からは、クリスマス寒波に見舞われるそうだ。

発 605—乗鞍 730—小連華 1100—白馬 1400—小屋 1430

12/25 風雪。今日は、出発しようと思っていたが、昨日と同じ天気であったため、沈殿。しかし、クリスマス寒波なんて大袈裟なものではない。天気図を見ても、大陸の高気圧は、どっしりと腰を据えた形ではなく、むしろ明日あたりチギれて移動高になりそうな雰囲気である。冬なのに、いっこうに冬型になつてくれないのも、天気の判断がつきにくく、まったく困る。夕方には、一時的に晴れ、遠く槍までも望むことができた。皆で、もう一度頂上に登りはしゃぐ。

12/26 風雪。できるだけ今日は動きたい。天気図によると明日は晴れそうなので、明日中に不帰を越えたい。今年はまだ一度も、はっきりした冬型の気圧配置になっていないので、今度の晴れをのがしたら、きつと冬型が定着し、結局、不帰は越せず、白馬どまりになってしまう可能性があると思うからだ。風雪とはいっても、白馬周辺にしては、かなり穏かで、たゞ気温が多少高いために、なんとなくガスっている感じの日が二日も続いているのだ。今日も、そんな天気である。たゞ多少、いまよりよりは、穏かな感じを受ける。少しでも不帰に近付きたいという焦りが、そう思わせるのかもしれない。一応、天気図をとったりして様子を見、偵察に出て出発してもよいか判断し、結局、今日は、無理をしない範囲で頑張ることにする。とはいっても、出発すること自体が無理なのかも知れないが、明日は、おそらく晴れるだろうという予想のもとでは、不帰を越すためには今日の行動は、止を得ないと考えた。ここが不帰を越せるか、越せぬかの境目かと考え、今日動くことが作戦上重要であろうと思った。なんとか視界が利くので丸山までは、すぐに行けた。しかし、丸山からの下りが急で、なおかつ、広いためルートをどちらに取ってよいのかわからなくなり、結局迷ってしまった。一応、丸山までもどり、ルートを捜すことにした。ルートは、割と簡単にわかった。しかし、こゝで東大の二人から今後このように迷っては進み、迷っては進みということを繰り返し、そのため大して進むことも出来ずなおかつ、消耗が大きいのでは却って良くない。だから引返すべきではないかという意見がでたので、我々も、今後天気が大きく快方に向うこともなさそうだし、むしろ悪くなって杓子のトラバースの基点あたりで迷って雪崩などにあっては却って一大事と考え、引き返すことにした。しかし、明日もたいして天気が良くならず停滞せねばならなくなったら、それこそ白馬止りで今山行は終わってしまう。明日は、今日よりも多少でも良い天気なら無理しても絶対に不帰まで行ってやろうと考え、そのために杓子のトラバースの基点まで偵察に、喜仁とぼくで出掛け、旗をつけておいた。

発 7 1 0 - 村宮小屋 8 2 0 - 偵察 (1 1 0 0 まで)

12/27 朝方小雪のち快晴。今朝も、昨日と同じような天気。出発できるか様子を窺う。7時頃から急に西の空が晴れ出し、剣そして槍まで見えるようになる。今日晴れても、明日中に不帰は越せぬだろう。行動の残りはあと四日ひとたび冬型が定着すると4日などはまったくに等しい。天気予報によると、このすぐあとはいよいよ寒波が来襲するそうだから、へたに前進して後退もできないような状況に陥るとたいへんだ。なにせ途中の退却路は、杓子東尾根しかなく、ここも緊急の避難路として使うには、まったく未知であるから。しかし、一応は、ポピュラーな退却路である。これにすがって、前進することにした。杓子東尾根から白馬へ向うパーティーと途中会った。杓子は、急な斜面をトラバースした。急な斜面を2ピッチ程登ると白馬鑓の頂上であった。まったく快調そのもの。極めて展望もよく日本海果ては佐渡まで見渡せた。不帰の深く切れ込んでいるのが気になる。一気に天狗

山荘へ下る。竜谷大のパーティーが、今日山荘を出て五竜へ向ったのを知る。こんな天気だ。もしかしたら今日中に不帰を越えられるかと考え、先を急ぐ。天狗の大下りは、1ピッチで下る。石がいたるところにゴロゴロしていてアイゼンで歩くのに不安を感じた。不帰一峰は、ただの急な登りであり、難なく突破。さて、いよいよ問題の二峰である。二峰は、考えていたよりも困難に見える。時間も、もう二時、さて今日中にここを越えることはできるか。一応、喜仁と厚生で、ザイル工作をする。ザイル8ピッチ目位の所に、かの竜谷大らしき人影を認める。最大の難所と思われる5m位の岩峰を抜けたあたりで、一応二本のザイルを使い果す。以後、さらに難所が続くこと。時間もすでに4時。多少暗くなっても前進したい所だが、これでは遅すぎる。二峰の基部に幕営。夜から、吹き出す。

発800—白馬鍵1030—天狗山荘1120—コル(天狗大下り)1320—二峰基部
1400—偵察1600

12/28 雪。視界悪く沈没

12/29 朝方曇のち風雪。今日こそ不帰突破。岩峰までは荷物を一々引っぱり上げていたので多少時間をくう。3ピッチ目は、ナイフの刃渡り気味で多少怖い。4ピッチ目は、烏帽子型の岩目がけて、容易な、岩まじりの雪面を登った。テントが張れるほどのテラスに出る。夏道を指す道標を発見。唐松までは、3時間とのこと。

以上4ピッチ、一昨日のザイル工作の分も入れると結構時間がかかっている。ここから1ピッチ登っても、なお岩場は続き、2ピッチ目はかなり悪そう、さらにその上は雪が降り出し全くわからない。もうそろそろ岩場も終りそうだが、この分だところを突破するのは、今日中には無理の様だ。風雪になってきた。一応、ここにテントを張り、ザイル工作をする。2ピッチ行くと鉄ハシゴを発見、はゞ岩場を通過したことを確認。前進しなかったことをくやむ。なにせ岩場に取り付いてから三日、細かく神経を使って気持の上で、解放感が全然ない。まったく、くたびれた。ここを越さねば帰れないと思うと早いところ越してさっぱりしたい。

発720—幕営1030—ザイル工作1330

12/30 風雪。沈没。天気予報によると、今後晴れる見通しなし。ここからちよつと向うのスキー場では、スキーヤーがぬくぬくとやっているかと思うと、なんだかいら立つ。

12/31 雪のち煙霧。雪は降っているが風は弱い。早いところ、こんな所抜け出そう。昨日工作したフィックスがなくなった所で岩場が終った。視界は10m足らず、できるだけ黒部側に行く。所々にペンキの印を見付け、なんとかまちがえずに進む。三峰への登りは、ちよつとわかりにくかった。三峰からの下りで道をまちがえたが、すぐにルートを発見。ほどなく唐松

の頂上に立つ。ここに立つのを待ち草臥れて、感慨も湧かぬ。小屋で休む。だれもいなかった。八方尾根を下る。途中、10パーティー80人位の人間とすれちがい、うんざりする。黒菱平に着いたとき、やっと喜びが湧いてきた。オーバースボン、ヤッケ、アイゼンを取り煙草を吸う。満足。

〔感想〕 西朋以外の二人とパーティーを組んだが、二人ともよくチームワーク維持に努めてくれて、山行初日から旧知の仲のような感じで登ることができた。途中、意見の対立もあったが、うまく積極的な方向に折れ合いが付き、今回の成果を得たことは、まことに嬉しい。久し振りに意気の合った昔流の山行ができ、本当にすがすがしい気持ちである。

伊東記

福田善明君を悼む

小川建吾

会員、福田善明君は、勤務先の三菱商事山岳部の昭和44年の夏山合宿の一環として、同部の岡部浩子さんと黒部峡谷溯行中、8月11日奥黒部ヒュッテを出発したまま消息をたちました。当時の集中豪雨等の異常な自然現象や関係者の話、及び数度にわたる搜索の結果、東沢出合から東小沢間で鉄砲水にまき込まれ、二人とも遭難、死亡したと判断せざるを得ませんでした。ここに福田君、岡部さんの冥福を祈ります。

私は、その直後搜索のため現地におもむき驚かされました。大町から扇沢への道は何トンもあると思える巨岩が散在し、舗装道路は各所で生々しい傷口をひろげていました。針の木峠から落ちる大沢のふくらんだ流れの様子は、人間が機械力で完成した道路の一夜の崩壊を当然のこのように誇っている自然の凱旋のようですらありました。トンネルを抜け黒部ダムの畔に立ったとき、そこでも満ちとした濁水とダムとの悲しい平衡を見出したのです。

私は今まで地球は完成されもうその内部は変化することなく、たゞその表面のみが昼と夜との夏と冬との装いを変えるのみと思っていた。しかし今、黒部の奥地で私が目にした光景に、地球の生きた姿を初めて見せつけられたのです。山々はその肌をえぐり、土にまみれた流れを吹きだしていたのです。陰惨ともいえる自然のすさまじさの中に、あの微笑みにみちた福田を求めねばならないことはつらいことでした。路はいく箇所も失なわれ、川床は数十メートルも上がり、数日のうちに誰もが想像すらできない別世界が黒部に創られていた。連日の搜索は困難をきわめ求める姿は尾根にすら見いせなかつた。止まるところを知らぬ自然の営みは、その間も湖をうめ谷をけずり続けた。その巨大な地球の脈動の前に、私は福田はもう還ってしまったのだと感じざるを得なかつた。荒々しい岩とともに福田が流れたと想像するのは辛く悲しいことです。しかしこの若き自然を目前にしその現実を受け入れねばならなかつたのです。福田は気のやさしい無類の好青年でした。たくましくなつた体つきは、今後の活躍を大いに期待させたものでした。いつも会の和のかなめであつた福田善明はもういないのです。あこがれの黒部で大地に還つていったのです。黒部の土に肉体を埋め我々の中に心をうめているのです。山にはすでに秋の風が吹いていました。

昨秋、山口県萩市の福田家の墓にもうでました。萩は澄んだ光に白く土塀の輝く静かな町です。日本海の潮騒を近くに聞くお寺の一隅に26才の短い生涯をとじた青年、福田善明の墓がありました。そこにたゞずむうち、この町が育てた若き明治の志士たちと福田の生涯が妙に重なって感じられました。萩の若者はどうして短命なのだろうか。福田も短いながら、その日々に力の限り生を求めていた男だつたと思います。

追記： 福田善明氏は、昭和44年8月1日、北アルプス奥黒部ヒュッテを扇沢に向う途中鉄砲水に遭われ不帰の人となりました。既に、御存知とは思いますが、ここにその遭難の際の状況と以後の捜索活動のあらましをお伝えします。

福田善明氏は、岡部浩子氏とともに、三菱商事山岳同好会夏山合宿・剣岳集中登山に参加中、折からの集中豪雨のため事故に遭ったものです。

月日	天候	予定	実際の行動
8/6 水	晴のち雨	2100上野発	2100上野発
7 木	〃	富山—折立—太郎—薬師沢	富山—折立—太郎—薬師沢
8 金	曇	薬師沢から上ノ廊下を経て 奥黒部ヒュッテより平へ	薬師沢—高天原山荘（小屋泊）
9 土	雨		山荘—（高天原新道）—広河原
10 日	豪雨	平小屋—五色ヶ原—ノ越—剣	広河原—奥黒部ヒュッテ（小屋泊）
11 月	豪雨のち霧	剣岳— 往復	830ヒュッテ発以後消息不明
12 火	曇のち晴	帰京	

8月11日の2人の行動については、情報収集の結果、次のように考えられます。当日の朝2人は豪雨のことを考え、出発について判断を迷い、結局8時30分に出発する。東沢は水嵩がかなり増し、吊橋下1m位まで水位があったと思われるが、通過可能であった。以後2通りの行動が考えられる。1つは、そのまま平ノ渡しに向かって進み東小沢で鉄砲水にやられたという可能性。しかし、東小沢の鉄砲水は、9時以前に起っているはずであるから、二人の足どりからしてこれに遭った可能性は少ない。むしろ、平ノ渡しに向ったものゝ途中から危険を感じとり、奥黒部ヒュッテに引返そうとするところを東沢の鉄砲水に遭ったと考えるべきではないかと思われます。時間はおよそ、9時少し前から、9時半までと考えられます。

捜索概況

第1次捜索

8/18~20

西朋・商事合同で遭難付近一帯を捜索。各方面から情報を収集する。手がかりなし。

第2次捜索

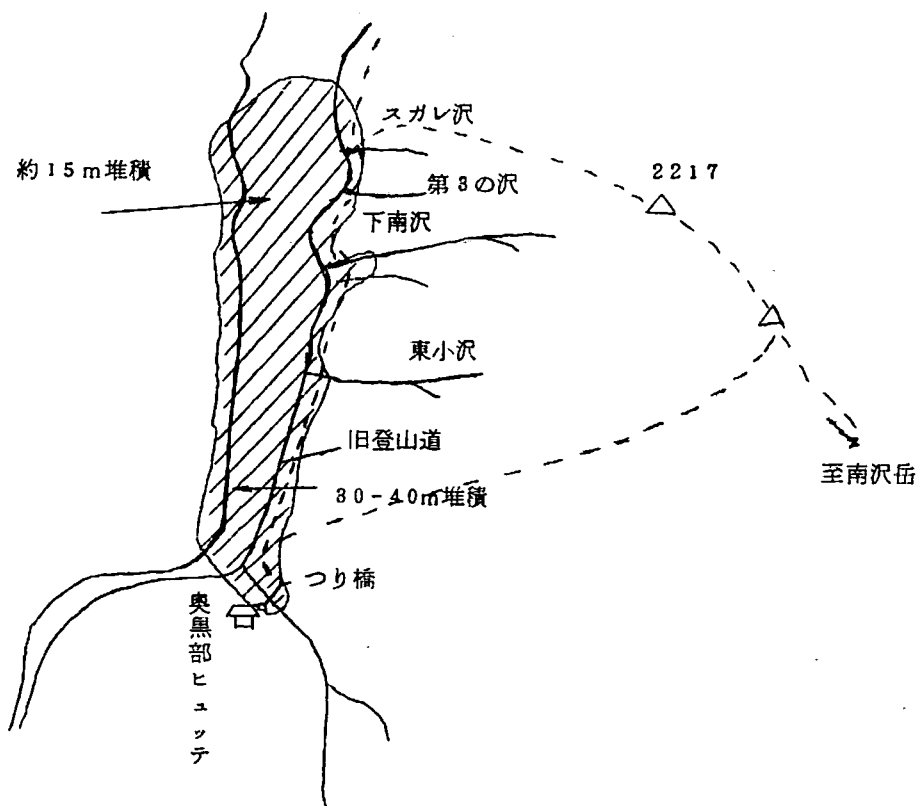
8/29~31

遭難推定場所付近を、ある程度広範囲にわたり捜索。尾根筋、河原、湖面等。（西朋・商事等）一切の遺留品発見できず。

第3次捜索

9/12~14

第1・第2次捜索では可能性のある箇所は捜索したが、さらに尾根筋を探る（商事）



一付近略図一

第4次捜索

9/28~26

一ノ瀬輝義氏(奥黒部ヒュッテ主人)よりの伝言で、緊急捜索。発掘作業。(商事)

慰霊祭

10/10~11

10日、奥黒部ヒュッテに、御家族、知人、西朋・商事関係者総勢50余名結集し、午後3時より慰霊祭を行った。山の歌を合唱して、冥福を祈った。

45年2/14

和田堀廟所で葬儀。

遭難一年祭

8/7~11

商事・西朋で、夫々慰霊祭を行う。

伊東記

西朋の現状

一時衰退しそうであった西朋も一昨年、昨年とかわり、少数実動メンバーにより維持されてきましたが、昨年の夏山過ぎから新人部員2名が、次々に抜け、現在は、大学四年生3名という結果になりました。今年度は、新人1~2名入りそうな様子でありましたが、それも空しく、現在の3名が社会人となったそのときは、実動メンバーは実質上ゼロになります。

一時、西朋が衰退しそうであるというので、西朋を魅力ある場にしようと、夏山10日間藪こぎ合宿、剣岳チンネ総ナメ、装備の軽量化、昨年度夏期の南アルプス赤沢・沢登り合宿、冬山後立山縦走と新しい試みを次々と打出したにもかかわらず、我々の後輩は、それに付いて来ませんでした。

山登りとは、苦しいものです。苦しいもの故、この苦しさの中から喜びを手に入れるには、ある程度の忍耐が必要です。しかし、その忍耐を取ってやってみようという人間が最近いなくなりました。もちろん、山登りをする後輩は、幾人もおられます。しかし、彼らは、取って困難な山行を試みようという意欲には欠けているようです。現在、社会が多様化し、様々な事象、情報が我々の中に、山ほど入ってきます。このようななかで、所謂遊びにも、いろいろなものが出てきました。ちょっとお金さえ出せば、手間、暇かからぬ遊びがすぐできます。その典型が、ボウリングです。このような世の中です。無理に誰も苦労はしなくなるのが当り前かもしれません。仕方がないと思えばそれまでですが、何故か寂しいものを感じます。この20余年の年月に先輩たちが、わずかながらも蓄えてきたこの技術、知識・経験が、ここで途絶えてしまうのかと思うと残念です。まあ、これで西朋が、終わりと決ったわけではないのですが、もはや山登りという遊びの終末感を感じます。今後再び、機械文明・公害の進行する中で、自然に対する人間の回帰本能から山登りも盛んになり、西朋も蘇るかもしれませんが、そのときは、恐らく我々が考えている山登りとは異ったものになっているでしょう。

しかし、しかしである。ここで気を取りなおしてほしい、西高を卒業し現在浪人中の諸君、西高ワングルの諸君、是非とも西朋に入ってきてちょうだいな。!! まだまだ若いのおじいちゃんぶっている西朋会員よ、きみたちも一緒に山へゆこうではないか。!

実動メンバー

伊 東 伸 作 (リーダー) (21期)

中 村 正 俊 (21期)

渡 辺 喜 仁 (21期)

(女子) 入 戸 野 ま ゆ み (21期)

渡 辺 容 子 (24期)

(我々の今年は、充分に山行を行えない。)

—— 伊 東 記 ——

—— HOT(アツアツと読む) 。 NEWS ——

梅原氏 (17期) , 抜けがけ。!!

西朋12期の未婚の三人組 (小川, 梶内, 川田氏) を出し抜いて, 47年10月に結婚。奥さんは, みどりさん。今年, 7~8月に出産の予定。月勘定すると, きわどいところです。

西朋の三問題児の1人, 川田氏結婚。!!

奥さんは, 由紀子さんです。結婚と同時に, 奥さんの強い要望により改名しました。彼いわく, 「秀 (ヒデ) チャン (旧名・秀明) と呼んで欲しい。」。現在, Free (失業?) のカメラマンとして, 王子の団地でブラブラしているそうです。

小川氏, 電撃的に結婚。!!

奥さんは, 静子さんといい, 東大で実験の助手として働いていたところを, 年令的に焦りを感じていた小川氏につかまったそうです。昨年一年, 小川氏は, 非常に忙しいといっておりましたが, その実, 何をしていたのやらと影口がたたかれています。

—— 伊東記 ——

—— 消息 ——

○就職

三 浦 潤 (18期)	安宅産業	[47年度]
岡 田 徹 (19期)	第一勧業銀行	[47年度]
山 野 裕 (19期)	花王石鹼	[48年度]
依 田 桂 子 (22期)	明正交易	[47年度]

西高W・V部近況 (72年度)

4/30 新入生歓迎会 鷹ノ巣山

参加者: 森下, 鈴木, 遠藤, 米倉, 戸倉, 広瀬, 角田, 中尾, 伊東, 遠藤, 水森, 副島,
1年5名: 吉野, 中村, 水野先生

昨年と同じ鷹ノ巣山。いつもと違って楽な山行。これに, 欺された一年は……

5/5 雪上訓練 谷川岳幽ノ沢

参加者: 遠藤, 米倉, 広瀬: OB梶内, 山野氏

キックステップ, 滑落停止, 「のぼれ〜!」「おりろ〜!」「とまれ!」あざができ, 靴底がはがれ, おまけに雨までふれば, いうことなし。

6/10~11 三頭山

参加者：OL 森下，SL 遠藤，米倉，戸倉，広瀬，角田，中尾，伊東 遠藤，水森，副島，一年にとっては初めての山行。天気もよく，荷物も軽く，予定よりはるかに速いペースで快適な山行であった。

6/24~25 小金沢連嶺

参加者：OL 鈴木，SL 遠藤，戸倉，広瀬，角田，中尾，鐘江，伊東，遠藤，水森，副島，恒例の大菩薩。トレーニングを目差しながらも，ザックマヒには細心の注意を払った。なんとか重症者はださなかったが，下山途中の猛烈な雷雨で全員ヘトヘトで初鹿野に。

7/24~30 夏山合宿

薬師岳—黒部五郎—三 俣蓮華—双六—槍—中岳—南岳—上高地

参加者：OL 遠藤，SL 米倉，戸倉，広瀬，角田，鐘江，中尾，伊東，遠藤，水森，副島
OB 山野氏

山行中はいつも晴れ。毎日近づく槍をながめての山行は，連日雨だった昨年の南アに比べて夢のようであった。

8/16~18 尾瀬（一般参加山行）

参加者：OL 遠藤，SL 戸倉，広瀬，角田，中尾，鐘江，一般参加者2名，同行・菅野，中込先生

山行直前になって女子が不参加となり，結局，男子2名しか参加がなかった。シーズンオフの尾瀬ではあったが，のんびりした非常にゆとりのある山行だった。しかし，男子2名では……

9/22~23 巻機山—割引沢

参加者：OL 遠藤，SL 戸倉，広瀬，中尾，角田，伊東，遠藤，水森，副島；OB，山野，伊東，中村，依田，西井氏

ひろびろとした上越の沢は，素晴らしい。滝もザイル様にすがつてのぼれたし，稜線もとても気持ち良かった。

9/30~10/2 甲武信岳—雁坂峠

参加者：OL 遠藤，SL 伊東，遠藤，副島

11/11~12 春山偵察 八カ岳（大河原峠～北横岳）参加者：OL 遠藤，SL 戸倉，広瀬，中尾，鐘江

赤布をつけながら歩いたのでかなり時間をくったが，偵察はいちおう済ませる。大岳への登りが気になった。一応，春山は大丈夫。

12/25~30 スキー合宿 岩岳スキー場

参加者：OL 遠藤，SL 戸倉，角田，中尾，鐘江，伊東，OB：永井，山本，水口，吉田氏，

暮営はしたが畑の中。スキーはやったが草の上。帰る日には雪が降り、ほんとにほんとにご苦労さん。

1/20~21 雲取山

参加者：OL 遠藤，SL 戸倉，広瀬，中尾，遠藤 雪上訓練。雪はかなりあったが，訓練をやるには不十分で，歩行訓練のみで終わった。キャラバンで歩く人を横にみて，わざわざラッセル：雪には慣れた。

3/22 那須岳

参加者：OL 遠藤，SL 戸倉，中尾，伊東，遠藤，OB:吉田氏

風が強く，飛ばされそうで，目的の朝日岳山頂には立てなかった。滑落停止は，なんとか練習できたが，本番でとまればよいが……

3/26~31 春山合宿，八カ岳縦走

双子池—雨池峠—竊枯山—高見石—中山峠—天狗岳—夏沢峠—硫横岳—赤岳往復

参加者：OL 遠藤，SL 戸倉，広瀬，中尾，遠藤，伊東一年間の最後をしめくくるべく行った山行であった。昨年できあがった縦走を反対側から貫徹でき，一応の成果はあったと思う。天候もあまりよくなかったが，春山の気分を満喫できたと思う。

会 員 名 簿

◎ 特別会員

都 筑 修 一	390	長野県松本市女鳥羽町 2-3-6	(02634-22) 4709
(故)鳥山 榛 名			
中 村 淳	155	世田谷区代沢 2-25-20 (西高 S 18~46)	(411) 1974
岩 井 富士雄		台東区浅草桂町 3-2	(851) 1908
布 施 千恵子	176	千葉県稲毛町 2-4 (西高 S 26~28) 現在 都立竹早高校	
篠 崎 武	190-01	西多摩郡日の出村大久野 1718 (西高 S 25~現在)	(0425-97) 0706
石 井 学	167	杉並区善福寺 3-10-19 (西高 S 21~43) 現在共立女子大	(390) 3987

◎ 普通会員

安 藤 英 彌	1 190-02	多摩市桜ヶ丘 1-42-3 富士重工	
林 春 彦	2 663	西宮市川原林町 23-13甲林ビル 303号 日本鋼管	(0798-67) 8534
南 波 貞 敏	2 185	国分寺市南町 2-10-22 大林組横浜支店	(0423-21) 2361 (045-201) 4181
長 崎 正 躬	4 241	横浜市旭区左近山団地 1-4-304 NHK報道局外信部	(045-382) 5088
田 中 将 利	4 167	杉並区西荻北 2-11-13 西荻窪 マンション 405 田中金属 K K	(396) 6410 (330) 2151
田 中 実	4 180	杉並区阿佐谷南 1-3-18 中央電気通信 K K	(311) 6389 (311) 1101
平 沢 勇	4 249	逗子市新宿 2-13-6 シーサイド 平沢建築設計事務所 ハイッ 101	(0468-73) 5410 (270) 7788
笹 田 英 次	4 164	中野区中央 3-15-4	(363) 7631
山 口 雄 弘	4 180	武蔵野市吉祥寺本町 2-14-27	

佐 藤 信 治	4 192	八王子市本郷町 8-7 大栄商店	(0426-23) 5347 (同上)
松 田 朝 夫	4 565	大阪府豊中市新千里西町 2-8-4 松下電器 進相コンデンサ事業部	(068-32) 5280 (06-862) 1121
町 田 明	4 167	杉並区下井草 4-20-20 テムデザイン会社	(390) 3217 (543) 8337
見 里 朝 規	4 679-41	兵庫県龍野市龍野町日飼 225-4	
渡 辺 享	4 187	小平市鈴木町 1-258-2 医院経営	(0423-42) 3517 (同上)
目 沢 民 雄	4 167	杉並区上荻 1-21-25 海城高校	(398) 6578 (209) 5880
成 瀬 泰 雄	5 163	文京区西井 2-8-7 日本鋼管工事橋梁部	(813) 2443 (045-521) 2211
加 藤 鈴 夫	5 191	日野市南平 1083 キュービーKK	(0425-91) 2149 (300) -1111
鈴 木 潤	5 168	杉並区浜田山 3-20-2 富士銀行	(312) 2791
岩 崎 元 子	6 168	杉並区高井戸東 4-13-29 法務省	(333) 9751 (261) 8581 内303
桑 田 敏 子	6 246	横浜市戸塚区二ツ橋町 475 (旧姓 亀山)	(045-36) 5336
稲 田 弘 美	6 351	埼玉県朝霞市膝折 433 (旧姓 伊藤)	(0484-62) 2605
飯 塚 康 史	6 190	在米、79年6月に帰国予定 日本IBMKK技術企画部	
岩 波 康 之	6 124	葛飾区堀切 4-2-2 岩波ローラー	(693) 1873
米 野 弘 躬	6 190	立川市富士見町 6-180 富士見町住宅 K. K. 陽成社	(0425-25) 8643 20-503 (269) 4611
小 田 尚 於	6 181	三鷹市下連雀 4-6-30 三井建設	(0422-47) 4849 (863) 3111内2027
林 武 志	6 180	武蔵野市吉祥寺東町 1-11-7 三星産業KK	(0422-22) 4338 (292) 1961

川口和雄	6 215	川崎市百合ヶ丘1-9-7 伊勢丹デパート	(044-96) 0162 (352)1111 内3502
松田 稔	9 182	調布市柴崎2-13-3 つつじヶ丘ハイム B-606	(309) 5629
黒沢 隆	10 251	藤沢市藤ヶ岡1-4-10-204 日本钢管輸出部	(0466-24) 2165 (212) 7111
橋本 剛太郎	11 770	徳島県徳島市南田宮1-4-30 建設省宿舎 建設省	
今井 義治	11 227	横浜市緑区桜台3 三菱化成桜台アパートA501	
田中 康弘	11 184	小金井市本町5-22-18本町 住友商事白油課	(0423-83) 1576 コーポラス502 (217) 7204
沢野 徹	11 211	川崎市中原区上小田中1213-4 富士見荘13-103 専大大学院	(044-78) 3160 (044-91) 7131
関谷 興雄	11 180	武蔵野市境南町1-12-15 和光交易	(0422-31) 7774 (552) 8256
小川 建吾	12 181	三鷹市下連雀2-12-24 三笠方 東大原子核研究所	(0422-47) 7394 (0424-61) 4131
島内 俊夫	12 165	中野区上鷺宮1-9-17 東工大	(990)7658内205
川田 秀明	114	北区豊島5-4-1-1036	(319) 8206
橋本 章	12 254	平塚市八幡477 日本ソーダ生物研究所	
野原 光	13 213	川崎市高津区宮崎1540 東大農学部	(044-86) 9455
板垣 乙未生	14 980	仙台市国見8-3-16 東北大学	(022-33) 8706
山本省治	14 189	東村山市若葉町2-2270 東村山大成 大成建設東京支店土木部工務室 建設アパート158号	(563) 6611
小津 亮介	14 188	府中市紅葉ヶ丘1-11-42 天野吉原設計事務所	(0423-62) 8921
平木 桂太	15 167	杉並区南荻窪4-12-16 川崎製鉄人事部	(882) 2897 (212) 4511
上遠野 清	17 869-11	熊本県菊池郡菊陽町大字戸次 〔自宅〕杉並区今川2-4-16 全日空乗員基礎訓練所内	(899) 4097 (0962-32) 2289

梅原伸二	17 156	世田谷区船橋7-8-1-803	(484) 5153
		大成建設	(568) 2851
官武義照	18 316	日立市西成沢1-33-1成美寮205号	
		日立製作所日立工場火力設計部	(0294-21) 1111
尾崎純理	18 176	練馬区練馬3-17-1	(991) 4279
		司馬法律事務所	(591) 3421
滝口道生	18 378	群馬県沼田市東原新町1484-14	
		豊多摩高校	(393) 1331
三浦潤	18 592	大阪府高石市綾園4-5-23	(0722-61) 2006
		安宅産業 安宅高石寮	(06-231) 8061
山野裕	19 273	船橋市行田8 花王石鹼寮	(0474-31) 5988
		花王石鹼	
岡田徹	19 167	杉並区本天沼3-26-5	(396) 0912
		第一勧銀上野支店預金係	(882) 8231
永井祥一	20 167	杉並区本天沼3-41-2	(399) 3318
		講談社	
伊東伸作	21 180-03	東久留米市ひばりヶ丘団地168-206	(0424-64) 6515
中村正俊	21 166	杉並区成田西3-10-26	(311) 8647
渡辺喜仁	21 166	杉並区阿佐谷北5-9-13	(337) 2685
佐久間令子	19	練馬区三原台3-5-16	
高木彰子	19	武蔵野市吉祥寺本町4-24-9	(0422-22) 6688
入戸野まゆみ	21	杉並区高円寺南2-17-15	(312) 4920
山田優子	21	武蔵野市西久保1-37-4	(0422-51) 2260
		朝日タウンズ	(0425-25) 4811
依田桂子	22 214	川崎市多摩区生田6659-49	(044-96) 2561
		明正交易	(552) 7871

{追記 50頁へ}

西高部員名簿

{25期}

(OL) 森下道夫	177	練・下石神井1-84	997-1056
(SL) 鈴木健策	176	練・中村北2-4三井東庄アパート	990-6747
久米祐一郎	167	杉・本天沼2-47-3	890-0651

女子

(CL)	山田清美	153	目・東山町2-13-18三井東圧アパート1-12	713-2549
	住山愚美子	167	杉・南荻窪4-3-15	333-9821
	内藤絹恩	165	中・江古田3-2-17	386-2952
	山成久美子	168	杉・宮前2-17-12	333-4853

(26期)

	遠藤彰	182	調布市深大寺町677	0424-83-1365
	米倉幸嗣	168	杉・宮前4-5-3	333-8766
	戸倉滋	168	杉・久我山4-41-15	332-3401
	鐘江和美	166	杉・浜田山2-7-8	302-5884
	角田肇	167	杉・善福寺3-14-10	390-5065
	中尾伸二	167	杉・上荻3-21-2	399-5830
	広瀬良介	180	武蔵野市吉祥寺南町3-12-5	0422-43-5679

女子

	大和田洋子	180	武蔵野市境南町4-16-3-408	0422-32-1688
--	-------	-----	-------------------	--------------

(27期)

(CL)	伊東顕	177	練・京大泉町567	922-4879
(SL)	遠藤信行	164	中・南台4-40-5	381-0071
	副島健	176	練・豊玉南3-23	922-1684
	東野俊治	164	中・本町3-15-18	372-5287

女子

	入江純子	166	杉・阿佐ヶ谷北3-14-14	338-8993
--	------	-----	----------------	----------

(28期)

	林哲明	177	練馬区大泉学園町530	922-7786
	野口太平	103	中央区日本橋横山町坂善商事内	663-7791
	玉田作哉	180	武蔵野市吉祥寺南町3-16-3	0422-47-1245
	浅野一哉	177	練馬区西大泉町1142	924-8621
	小川義夫	176	練馬区早宮町3-50-16	991-9687
	青谷知己	176	練馬区練馬2-31-7	992-6393
	世利孝哉	177	練馬区北大泉472-57	924-0546
	中島均	165	中野区沼袋1-22-8	385-0940
	小玉剛	180	武蔵野市吉祥寺北町1-20-3	0422-22-2664

山本哲郎 164 中野区東中野4-12-2 368-4075
 松本哲郎 164 中野区中央5-33-11 381-1692

—— 編 集 後 記 ——

- 「西朋」を作ろうと言い出してからすでに3年たち、その間、世代の交代もあり、やっとなりに出来上ったわけです。
- 現在、西朋も実働メンバーが少なくなり山岳活動は、以前のような形では、できなくなりそうです。これが、もしかしたら最後の「西朋」かもしれません。
- 女子会員からも、1-2通原稿をいただきましたが、一般に原稿の集まりが悪く、女子の記録としては、まとまった形で発表できなくなりましたので、御了承のほどを。また、一部、古くなったため時期的にずれのある原稿は、はぶきました。

伊東記

〔追記〕

羽柴春寛	20	168	杉並区下高井戸4の26の23	(304) 0032
西井和彦	28	167	杉並区善福寺2の1の2	(399) 4129
渡辺容子	24	168	杉並区久我山3ノ10ノ36	(334) 3824
住山恵美子	25	167	杉並区南荻窪4の3の15	(333) 9821
山田清美	25	158	目黒区東山2の13の18 三井アパート1の12	(713) 2549

西 朋

第 18 号

昭和 48 年 6 月 1 日 発行

編集人 伊 東 伸 作

発行所 西 朋 登 高 会

三 塚 市 下 連 雀 2-12-24 小 川 方

印刷者 東京大学出版会教材部

東京都文京区本郷 7-3-1

電 話 (8 1 3) 7 8 8 9